

関門地域における観光交流推進への地域資源の掘り起こし

坂本 紘二

1. はじめに

関門地域は、さまざまなレベルの領域間の結節点としての地理的な要所となっているために、多くの歴史的な遺産を抱え持ち、関門海峡を始めとして周辺区域も含めて、海、山、川、里の風景など自然景観にも恵まれ、なおかつ国際的な経済交流も活発にできる好環境にある。そのことは下関市民だけでなく、下関を訪れる誰もが認めるところである。

本地域は、歴史性と景観特性を有する関門海峡を中心に、観光資源が豊富であり、元より観光による地域振興のポテンシャルは高いのである。近年、海峡を挟んで両市においてウォーターフロント開発の施設整備が進み、それらとJRの観光キャンペーンやNHKのドラマ放映などが呼応しあって、入り込み客が増加し、観光面で活況を呈するようになってきており、ある面でこれらの「追い風」を味わいながら、改めて観光振興に焦点が当てられるようになってはきている。

しかるに、2003年以降、国によるビジット・ジャパン・キャンペーンを俟つまでもなく、東アジアに近い位置にある本地域にとって、より多くの外国人旅行者が訪れるべく、種々の観光資源を掘り起こし、両市が連携して、あるいは官民が連携して、観光ルート化を図るなどして、観光地としての魅力アップに努める必要に迫られている。

しかし、これまでは、「あり過ぎる」と評されるほどに、多種多様に抱え持つ観光資源を十分には生かしきれず、また、それら観光資源の各要素間を連結させた形で観光ルート化がそれほど十分には図られてはこなかった面は否めない。最近の「追い風」の状況の中で、いかに持続性、発展性を見出して行くか、が今改めて地域の重要課題として問われている。

また、これまでも「関門海峡観光推進協議会」設置（1997年）や「関門景観条例」制定（2001年）など、両市連携した取り組みも進められてきている。このような地域間・行政間連携策が、両市にどのように相乗効果を生み出すか、今後の関門一体となった関門地域の振興策にどのように結びつくか、についても正念場を迎えつつある。

さらに、下関市は2005年2月に周辺4町（豊浦町、菊川町、豊北町、豊田町）と合併し、人口は約30万人に、面積も県内最大の716km²になった。10月には中核市にも移行した。この広域合併により、下関市は背後地に農山漁村部を抱くことになり、体験・学習型、エコツーリズム等の新たな観光による地域振興策を実現するにふさわしい地域となる可能性がある。それゆえに、九州などで盛んになってきているエコツーリズムや体験学習型の新たな観光振興の動きなどとも呼応して、関門地域でも再度、地域資源の見直しや再発見の作業も進められるようになってきた。

本調査研究では、行政も含め市民団体等を中心に、合併時期に前後して進められてきた地域資源掘り起こし作業の動き、特に「誇り100選」選定の一連の取り組み（「下関の誇り100選」、「女性が選ぶ関門海峡の誇り100選」および「豊関の誇り100選」）、さらには「『下関ブランド』による地域振興方策調査」を取り上げながら、それらの取り組み方や調査の内容、あるいは、関門地域で《新たな観光》の開発や振興が今後どのように進められようとしているか、などを追跡しながら、観光による地域振興の課題を明らかにしようとする。

その際、合併後の動きや関門連携の動向もにらみながら、地域資産の掘り起こし作業を経た後に、それら多様な地域資産をどのように活かすことができるか、そのために必要とされる要件は何か、などについても明らかにしながら、今後の地域資産を活かした関門地域活性化のあるべき姿や方向性を探ろうとするものである。

2. 下関市の観光への取り組み—実態と課題

地域の産業の空洞化が進む中で、地域を生き生きとさせる人的な交流を盛んにするための手立てとして、また、改めて地域を活性化し、地域を再生させるための有効に機能するであろうテーマの一つとして、いま「観光」が脚光を浴びるようになってきている。

1市4町の合併を進める際の「新まちづくり構想」におけるまちづくり理念を、「自然と歴史と人が織りなす交流都市—自然と人、人と人、ふれあいで輝く共創のまちづくり—¹⁾」と謳っているように、新しい下関市の地域づくりのテーマの重要な柱の一つは、やはり「観光交流」である。広域化した中で、より多様化した魅力ある観光資源を上手に活かし、全市域で観光客を呼び込めるような「観光レクリエーションゾーン」としての発展をどのように目指せるか、が課題となっている。

既に1999年8月に山口県も「山口県観光基本構想—おいでませ山口ビジョン²⁾」を策定している。そのビジョンの趣旨を次のように述べる。「近年、産業構造の変化や技術革新・情報化の進展、高齢化社会の到来とともに、人々の価値観やライフスタイルがますます多様化しており、観光の分野においても、従来の団体を中心とした『見る』観光から、個人小グループを中心とする『食べる』『遊ぶ』『学ぶ』『滞在する』観光へと大きく変化し、そのための新たな観光資源の発掘・創造、指標目標の設定等、新しい観光振興の基本方向の検討が急務となっています。…(中略)…新たな視点に立って今後の基幹産業として成長が期待されている本県観光の発展方向と、それを実現するための具体的方策を明らかにする」と。

例えば第4章の戦略・プロジェクト、7戦略の内一つ「④交流機会創造戦略」の中では、観光客のニーズが広がり「四季折々の自然や祭り・イベント等、地域全体(自然、歴史、文化、住民等)との交流を求めており、話題性のある祭り・イベントの創出や観光客も参加できるようなしかけづくりを行うとともに、ルーラル・フェスタにみられる都市と農山漁村の交流の促進等、交流の場の充実を」図るとして、「グリーンツーリズム・ブルーツーリズム等の促進」や「道の駅・アウトドア施設等の活用による交流機会の拡大」などをプロジェクトとして取り上げている。また、第6章の地域展開の基本的方向の内「多様な観光ゾーンの形成」においては、「参加体験型の施設や観光メニューを増やすとともに、ボランティア人材の活用などにより、もてなしの充実を図る」、「テーマやストーリーにあう小規模の観光資源を連携し、テーマゾーンの形成を図る」などの展開による種々のゾーン形成が提案されている。

このように、観光は、いま、「観光」という用語すら似つかわしくないと感じられるまでに変化しようとしている。従来の視覚型、消費型から体験型、発見型、気付き型へとまた、多様なそして広い概念で捉える方向へと変わりつつある。

ではこの間、下関地域では、そのような「変化しつつある観光」の移行の状態をどのように受け止めてきたのだろうか。まず、さまざまな構想計画の中で、観光の取り上げ方を見てみることにする。

(1) 下関地域の種々の構想・計画の中で

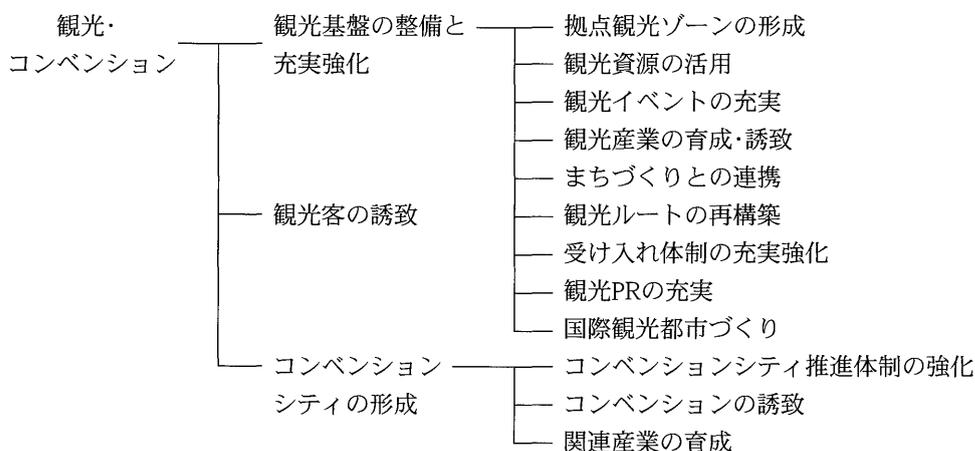
①【第四次下関市総合計画2001→2010(2001年3月)】³⁾

市の経済再生面での新しい課題として、国内及び東アジアをターゲットに観光産業を中心とした産業連携による交流人口の増加が急務であると認識した上で、これからのまちづくりの方向を示す4つの重点項目の一つに「観光」を取り上げ(他の三つは「子どもと高齢者」、「環境」および「国際」)、次のように述べている。「産業の活性化に向けては、まず、観光戦略を進めます。海峡ウォーターフロントゾーンを拠点に、広域的連携を図り、『ふく・うに・くじら』に代表される下関の食産業を集積して、街の魅力を創り出すとともに、コンベンション機能を高め、国内及び東アジアをターゲットにした幅広い誘致活動を進めます。こうして、人の交流・モノの交流の拡大を図り、産業分野内部だけではなく、他の分野との連携・複合化もいっそう進め、さらに新しい産業を創出して、産業全体の振興を目指します」と。産業活性化に向けてはまず観光戦略を進めるとし、施策の大綱の内「地域の特性を生かした産業振興」の項目の中で冒頭に「観光・コンベンション」を取り上げ、「関門海峡や豊かな歴史文化を生かし、交流人口の増加を図る魅力ある観光地づくりに取り組む」としている。具体策として、内外の観光客のニーズに対応する観光資源や拠点施設の整備、観光ルートの再構築、積極的なPRを実施し、コンベンション機能を高め、市民の受け入れ体制(ホスピタリティ)の充実に努め、また、新たな観光産業の創出、商業・水産業などの分野の複合的な集積、海峡のまちという地域の特性を生かした多彩な「食」や「特産品」の産出を通して、国内外の観光客が再び訪れたい観光都市を目指す、という。

以上の基本構想に基づいた基本計画においては、図-1に示すような施策体系の下に、総計25項目に及ぶ「施策の方向」が示されている。具体例をいくつか挙げれば、「観光資源の活用」として、「山陰海岸については海沿いの道路整備と連携して、自然を活用した観光の振興を図る」や『『ふく・うに・くじら』、韓国料理などの名物料理や特産品を、下関独特の観光資源として活用を図る』などがあり、また、「観光ルートの再構築としては「所用時間別や目的別の観光ルートの再構築を行うほか、周辺市町との連携を強化し、関門海峡の周遊コースを

中心に、魅力ある広域観光ルートの形成に努める」などとしている。

図一 1 下関市の基本計画における「観光・コンベンション」の施策体系



内容的には、数年前までの課題について、観光客のニーズの変化に対応できず、観光施設も老朽化・陳腐化しており、アクセス道路や駐車場の整備も遅れ、PRも不足するなどの種々の要因が重なって入り込み観光客が伸び悩み、経済波及効果が少ない日帰り型・通過型観光の傾向が続いている、などと述べているように、広がる観光ニーズに対応するための、観光用地域資産の更なる掘り起こし作業、参加体験型の試み、地域住民と一体となった交流促進のしかけなどの、山口県のビジョンにも謳っているような「新しい観光振興」策は、まだ盛り込まれていない。

②【下関地区第四次広域市町村圏計画2001→2010（2001年3月）】⁴⁾

前述①の「第四次下関市総合計画」と期を一にして策定された、合併前の1市4町を圏域とする（圏域設定は1970年7月、広域行政事務組合の設立は1971年8月）広域市町村圏計画である。「基本構想」における将来展望として、《潤いと魅力にみちた住みよい圏域》を掲げている。施策の大綱の「第4節若さと活力ある豊かな圏域」の「観光」については、以下の趣旨を述べている。つまり、「新たに多様化、広域化している観光客のニーズに対応した観光地づくりや観光情報機能の強化が求められており、本圏域の恵まれた自然環境等の観光資源の保全に努めると共に、新たな観光資源の発掘等を積極的に推進する。隣接圏域との連携を強め、広域的観光ルートの形成、啓発活動や観光宣伝を推進し、インターネット等による情報発信を行い、観光客のターゲットを広域化させ、今後一層激化する地域間競争に対応すると共に観光産業の振興はもとより、地域経済と文化を活性化させ、地域の振興を図る」と。観光資源の発掘と広域的観光ルートの形成を通して、観光振興を地域づくりに結びつけようとしている。

その内容を受けて「基本計画」では、多様化する観光客のニーズに応じきれず、既存観光施設の老朽化や陳腐化が進み、観光地へのアクセス整備の遅れから、圏域では、海、緑、温泉、特産品など豊富な地域資源や様々な観光資源が生かし切れていない状況にあることを課題として指摘した上で、既存観光拠点の再整備、未開発な観光資源の発掘の推進、および、隣接圏域との連携を含めた広域的観光ルートの再構築、そのための道路・駐車場をはじめ道路標識・案内板等円滑な誘導のための基盤整備、さらには内外観光客への効果的な観光情報とそのPRの充実、住民のホスピタリティの醸成を図るなどを挙げている。施策の体系を構成するのは、「広域観光ルートの形成」、「観光資源の整備・活用」、「地域住民との協力・連携」および「効果的なPR」の4点である。

主な事業として＜観光資源等の整備＞では、旧下関市で「国民宿舎海閑荘の改築（既に「海峡ビュー下関」として改築）」、「水族館の展示内容の更新、施設のリニューアル」および「巖流島の整備（既に整備）」、旧豊浦町で「フィッシャリーナむろつこの整備」、「青と緑の回廊構想」、「青龍街道の整備」、「川棚温泉街の環境整備」、「リフレッシュパーク豊浦の整備」、「厚母大仏の環境整備」、「マリンレジャーの整備」および「海水浴場の環境整備」、旧豊北町で「角島エコアイランドの整備」および「弥生パークの整備」、旧豊田町で「農業公園の整備」、「豊田湖畔公園の整備」および「フルーツロード構想」、圏域全体では「観光案内板、パンフレット等の整備」さらに、＜観光振興面＞では、圏域全体で「広域観光ルートの整備」、「観光宣伝隊の派遣」、「各種観光イベントの推進」

および「国際観光ルートの調査検討」などが盛り込まれている。既にハコモノ等で整備が進んだものもあるが、現状ではソフト面の強い地域資源や新たな観光資源の掘り起こしや広域的な連携を含む観光ルートの設定などについて、そのための取り組み体制の準備は、まだ十分には進められてはなかった。

③【下関市・豊浦郡4町 新市まちづくり構想（2003年9月）と同建設計画（2004年7月）】⁵⁾

下関市・豊浦郡4町は、2005年2月15日に合併し新しい下関市になった。『新市まちづくり構想』は、その準備段階で、2003年3月に「下関市・豊浦郡4町合併協議会」を設立し、合併についてさまざまな角度から検討・協議を進め、新市の将来ビジョンとして、各地域の特性を活かした新たな地域発展の方向性を示すことを目的に策定された。合併協議会の付属機関である「新市まちづくり構想策定委員会」（委員長は筆者）が、地域住民に対するアンケート調査や彼らが参加するワークショップでの意見等を参考にしながら、審議を重ねて答申を提出し、合併協議会で協議の上確認されたものである。その構想案を受けて、協議会で『新市建設計画』を策定している。

新市のまちづくりの理念は《自然と歴史と人が織りなす交流都市—自然と人、人と人、ふれあいで輝く共創のまちづくりを目指して—》である。その将来像の実現への取り組み7項目の内の一つとして「観光や交流から生まれる多彩で魅力あるまちづくり（観光振興）」が挙げられている。その中で、「製造業等の停滞や公共事業の縮小が予想される中、地域の新たな活気を生み出すために、観光等による交流人口を増加させることの必要」を述べ、「拠点施設の整備に努め、地域の自主的な交流活動を促進するとともに、地域ごとの施設どうしがネットワークにより連携し、新市が一体となったまちづくりに取り組み」、「海、山、温泉、フク、遺跡等の豊かな観光資源等、地域固有の自然や文化等を活用し、まちづくりや農林水産業との連携によるグリーン・マリンツーリズム、エコツーリズム等の体験型観光等の創出を促進」し、「地域内の観光交流はもとより、広く国際的な観光客の誘致にも努め」、「集客産業の関係者だけではなく、住民一人ひとりが、温かいもてなしによって訪問者を迎え入れること等、地域のホスピタリティの醸成に努め、観光や交流から生まれる多彩で魅力あるまちの実現を目指す」としている。

重点施策として、「地域住民・地場産業との連携による観光振興」、「まちづくりと連携した観光ルートや観光施設整備」および「観光ボランティアの拡充及び住民のホスピタリティの醸成」を挙げている。まちづくりの主要課題の一つにも「連携・交流の促進」を取り上げながら、構想全体で「交流・連携・相互のふれあい」を一つの基調にしており、観光振興においては、これまでの「観光」からの広がりの意味合いが意識されたような、地域の特質把握を把握した上での取り組み、また、地場産業あるいはまちづくりとの連動が盛り込まれている。「新市建設計画」では、主要指標一つとして人口、世帯数や就業人口の外に、交流人口（観光客数）を掲げている。近年順調な増加傾向にあるとして、合併を機に一層の広域観光交流の促進を図って、これまで最高の観光客数約550万人（2001年）を超える交流人口560万人を想定している⁶⁾。「新市の施策」の7本柱の一つである「観光や交流から生まれる多彩で魅力あるまち（観光振興）」の中では、以下3項目の振興・促進策が示されている。

- 1) 観光・レクリエーションの振興：既存観光施設の再整備、新たな観光資源の開発、観光拠点の形成とこれらのネットワーク化による広域観光ルートの形成。拠点やルートの形成には、まちづくりや地場の農林水産業等と連携した整備。観光ボランティアの拡充等、新市一体となったホスピタリティの醸成。
- 2) 連携・交流の促進：広範囲な様々な地域との交流・連携で各地域の特性を活かした一体的かつ均衡ある発展が図れるよう、交通情報網の整備や交流イベントの開催推進。
- 3) 国際交流の促進：姉妹・友好都市交流など国際交流の充実。国際レベルの会議、スポーツ・文化イベント等の開催推進。民間団体による各種活動の支援および相互の技術協力、人材派遣等の促進、国際航路の充実。

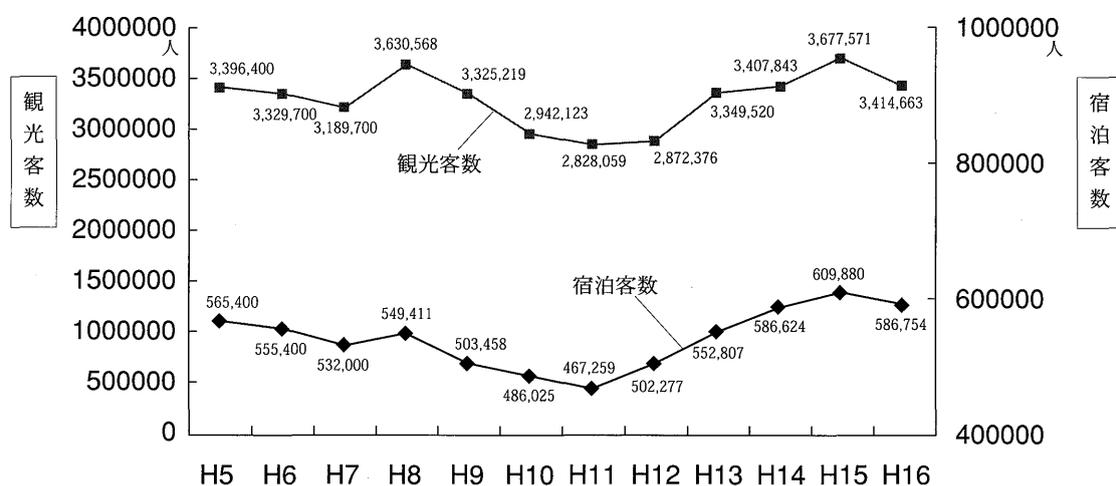
事業概要の例として「滞在型観光ルートの形成」、「グリーン・ブルーツーリズムの推進」、「交流型・体験型農林水産業の推進」および「観光交流イベント」などが示されているが、実のところ、新たな観光資源を発掘して観光拠点づくりを進め、既存の観光資源とも結びつけながら、どのように観光ルートを形成して行くか、まちづくりや地場の農林水産業等とどのように連携を図って行くか、など、体験型、発見型、気付き型の新たな観光ニーズに対応する具体的な取り組み方に関しては、各地域の観光協会などの組織が連携して、どこからどのような体制で臨もうとするか、まだ定かでなく、方向付けを描くだけにとどまっているような印象を拭い去れない。

(2) 下関市の入り込み観光客の動態と観光振興への取り組み

しかしながら、このところ確かに下関地区の観光はいくらか上向きな状況を呈している。図一2に1993（平成5）年～2004（平成16）年までの観光客の数と宿泊客数の推移をグラフで示している。なお、表一1には、さかのぼって1962（昭和37）年からの県内容・県外客も含めた同様の数値と備考欄に関連特筆事項を付して示し、また、表一2には、表一1の備考欄の内容と同じものも一部含まれるが、下関市が「観光都市宣言」を行って以降の観光関連記事を示している⁷⁾。

過去10年間の推移を見てみると、国際コンベンション施設「海峡メッセ」と「海峡ゆめタワー」がオープンして「国際会議観光都市」に認定された1996（平成8）年に363万人を突破している。その後、1998（平成10）年から2000（平成12）年の間は300万人を割って低迷していたが、2001（平成13）年以降回復している。その年2001年には4月に市立水族館「海響館」と新「唐戸市場」がオープンしたことが反転の大きなきっかけとなったが、7～9月に「21世紀未来博覧会（山口きらら博）」や北九州博覧祭が開催されたことも追い風となっている。2002（平成14）年には「カモンワープ」がオープンし、国民宿舎「海関荘」が「海峡ビューしものせき」としてリニューアル開業し、海峡の恵みを生かしたハードが次々と整備され「海峡まるごとテーマパーク」の装いが整って、観光客数はこの間高い水準を維持し続けるようになってきた。

「海峡ゆめタワー」や「海響館」のオープンまで下関の観光は、景観を誇る「火の山」、城下町情緒の「長府」「赤間神宮」など歴史的遺構等が中心であったが、下関の観光地イメージは、この間、「かつてのような《歴史》や《見晴らしの良いところからの眺望》といったイメージから《海峡に面したウォーターフロントの諸施設群の楽しみ》へと急激に変わってきて⁸⁾ いる。



図一2 下関市の観光客数と宿泊客数の推移（1993年～2004年、「山口県観光動態調査」より）

観光客増加の背景には、ウォーターフロント施設整備が進められる段階での、それまでになかったソフト面からの取り組み（ソフト戦略）が始まっていたことが大きい。画期をなした1996年には市民全員で観光地づくりに取り組むという「観光都市宣言」を行い、翌1997年には、関門を一つの観光商品として売り出すために、下関市、北九州市、山口県で県境を越えて取り組む「関門海峡観光推進協議会」が設立され、さらにソフト面で本腰を入れるために2000年には「しものせき観光キャンペーン実行委員会」を設立している。この委員会は、観光客の誘致と受け入れ体制強化の役割を中心的に担うもので、観光関連業界・団体（下関観光コンベンション協会や商工会議所、青年会議所、サンデン交通、商店街連合会など）と行政（観光振興課、観光施設課、地方市場課）が一丸となって取り組む観光キャンペーン推進の官民一体の組織（参加団体20、会長は観光コンベンション協会長と下関市長）である。2001年の「フクフクキャンペーン」や2004年の「EXOTIC&ノスタルジア関門・海峡物語キャンペーン」など各年さまざまにテーマを決め、観光戦略部会や種々の企運営部会を中心に、実働部隊による運営によって活動を活性化させている。

表一 下関市の観光客数の推移（1962年～2004年）

年次	観光客数	日帰り	宿泊	県内	県外	備考
昭和37年	1,094,000	744,000	350,000			S31年11月下関水族館開業 ※S33年3月関門国道トンネル開通 同年4月火の山ロープウェイ開業
昭和38年	1,203,400	853,400	350,000			
昭和39年	1,400,000	1,050,000	350,000			10月国鉄関門連絡船廃止
昭和40年	1,700,000	1,300,000	400,000			
昭和41年	1,750,000	1,400,000	350,000			
昭和42年	2,150,000	1,866,000	284,000			
昭和43年	2,130,000	1,798,000	332,000			
昭和44年	2,410,000	2,060,000	350,000			3月綾羅木郷遺跡史跡指定 5月海関往開業 10月長関・彦島線電車廃止
昭和45年	2,173,700	1,813,700	360,000			6月関釜フェリー就航
昭和46年	1,995,852	1,632,852	363,000	1,302,174	693,678	2月下関駅～幡生間電車廃止 8月関九フェリー就航
昭和47年	2,950,400	2,545,400	405,000	1,183,200	1,767,200	11月火の山パークウェイ開通
昭和48年	3,249,000	2,800,600	448,400	903,200	2,345,800	3月火の山展望台開業、マリランド開園、10月満寿荘開業、11月関門橋開通・中国自動車道(下関～小月)開通
昭和49年	3,380,900	2,964,200	416,700	701,900	2,679,000	7月中国自動車道(小月～小郡)開通
昭和50年	2,927,700	2,559,500	368,200	238,300	2,689,400	3月山陽新幹線開通 9月彦島有料道路開通
昭和51年	3,049,900	2,664,500	385,400	344,600	2,705,300	9月グリーンモール完成
昭和52年	3,046,900	2,702,900	344,000	438,700	2,608,200	10月シーモール下関開業
昭和53年	3,078,400	2,893,600	184,800	1,723,900	1,354,500	
昭和54年	3,102,600	2,936,300	166,300	1,737,500	1,365,100	4月火の山冒険の森開園
昭和55年	2,720,700	2,214,600	506,100	1,386,200	1,334,500	4月長府博物館市に移管
昭和56年	2,877,100	2,433,700	443,400	1,465,900	1,411,200	
昭和57年	2,935,600	2,505,500	430,100	1,497,200	1,438,400	
昭和58年	2,999,400	2,527,700	471,700	1,528,200	1,471,200	11月市立美術館オープン
昭和59年	2,886,700	2,481,400	405,300	1,470,800	1,415,900	
昭和60年	2,984,600	2,563,200	421,400	1,577,900	1,406,700	6月下関フィッシングパーク開業
昭和61年	2,964,900	2,546,400	418,500	1,567,600	1,397,300	5月第1回しものせき海峡まつり開催
昭和62年	3,292,100	2,827,500	464,600	1,738,300	1,553,800	
昭和63年	3,386,100	2,908,200	477,900	1,790,200	1,595,900	5月下関国際ターミナル完成 11月小月バイパス全線開通
平成元年	3,471,200	2,981,400	489,800	1,833,400	1,637,800	4月森の家下関オープン 9月海峡ゆめ広場完成
平成2年	3,521,000	3,023,900	497,100	1,870,700	1,650,300	
平成3年	3,597,900	3,010,200	587,700	1,919,300	1,678,600	7月日韓高速船「ジェットライナー」就航
平成4年	3,608,500	3,015,600	592,900	1,926,300	1,682,200	
平成5年	3,396,400	2,831,000	565,400	1,817,800	1,578,600	5月長府庭園開園
平成6年	3,329,700	2,774,300	555,400	1,781,800	1,547,900	6月下関駅前人工地盤完工
平成7年	3,189,700	2,657,700	532,000	1,707,100	1,482,600	5月考古博物館開館
平成8年	3,630,568	3,081,157	549,411	2,001,133	1,629,435	7月海峡メッセ下関オープン
平成9年	3,325,219	2,821,761	503,458	1,867,032	1,458,187	1-12月NHK大河ドラマ「毛利元就」放送
平成10年	2,942,123	2,456,098	486,025	1,538,033	1,404,090	1月青島市週1便定期航路就航 4月長府毛利邸開館 11月旧秋田商会ビルリニューアルオープン
平成11年	2,828,059	2,360,800	467,259	1,492,985	1,335,074	5月下関英国領事館重要文化財に指定 10月火の山公園立体駐車場完成
平成12年	2,872,376	2,370,099	502,277	1,864,679	1,007,697	3月しものせき観光キャンペーン実行委員会設立
平成13年	3,349,520	2,796,713	552,807	1,923,499	1,426,021	4月海響館開業、唐戸市場リニューアル 7-9月山口きらら博 7-11月北九州博覧会
平成14年	3,407,843	2,821,219	586,624	1,881,504	1,526,339	4月カワカ7開業、海峡ビューしものせき開業、JR西日本「関門・海峡物語」本格スタート
平成15年	3,677,571	3,067,691	609,880	1,904,675	1,772,896	1-12月NHK大河ドラマ「武蔵」放送 3月巖流島定期船就航 3-11月巖流島決闘寸劇 JR西日本「関門・海峡物語」継続実施
平成16年	3,414,663	2,827,909	586,754	1,815,500	1,599,163	1-12月大河ドラマ「新撰組」放送 みもすそ川公園整備(10月長州砲、12月義経・知盛像) JR西日本「関門・海峡物語」継続実施

注)暦年(1-12月)の数値であって、年度(4-翌3月)ではありません。

表一 2 下関市の観光の推移と関連事項

年	月	記 事	観光客数
平成8年		観光都市宣言 海峡ゆめタワー、観光コンベンション施設「海峡メッセ」オープン 国際観光都市に認定（JNTO加盟）	3,630,568
平成9年		関門海峡推進協議会設立（下関市、北九州市、山口県で県境をこえた取組で、関門をひとつの観光商品として売り出す）	3,325,219
平成10年	4月	長府毛利邸整備完成（歴史的建物のハード整備）	2,942,123
平成11年	10月	火の山公園新立体駐車場完成	2,828,059
平成12年	3月	しものせき観光キャンペーン実行委員会設立 （ソフト面での受入態勢強化のための中心的役割、部会を中心とした若手による運営）	2,872,376
平成13年	4月	下関市立水族館「海響館」オープン 新「唐戸市場」オープン	3,349,520
	7～9月	山口きらら博開催	
	11～3月	JR西日本広島支社 関門地区キャンペーン実施	
平成14年	3月	JNTO脱退	3,407,843
	4月	「カモンワーフ」オープン 国民宿舎「海峡ビューしものせき」オープン	
	4～5月	IWC下関会議開催	
	4～3月	JR西日本関門・海峡物語キャンペーン実施	
	7～3月	JR九州関門キャンペーン実施	
平成15年	1月	NHK大河ドラマ「武蔵」放映開始	3,677,571
	3月	巖流島整備完了（平成8年から工事着手）	
	4月～	JR西日本・JR九州キャンペーン継続	
	6月	平成17年NHK大河ドラマ「義経」に決定	
平成16年	1月	NHK大河ドラマ「新撰組」放映開始	3,414,663

また、JRの関門をテーマにした観光客誘致の取り組みも、以上のキャンペーンと呼応して観光客増加に拍車をかけている。2001年11月にJR西日本広島支社が関門地区キャンペーン実施を開始し、2002年度から「関門・海峡物語」キャンペーンを本格化させ、関西以西の客の呼び込みが功を奏し、その年にはJR九州も関門キャンペーンを行うようになり、以降JRは継続して関門キャンペーンを実施している。

さらに、この間NHK大河ドラマのテーマ設定も追い風ムードを煽る形で推移している。2001年を境に300万人台を回復していたが、2003（平成15）年には「武蔵 MUSASHI」放映を機に、前年までに公園整備が進んでいた巖流島への渡航が賑わい、約368万人という過去最高に達している。また、それまでほぼ入り込み観光客数と連動して2000年以降増加傾向を示していた宿泊者数（宿泊比率は約17%）も過去最高となっている。立ち寄り通過だけの観光ではなくなっていることの表れでもあるが、海峡ウォーターフロントの開発が観光面で好環境を創出しただけでなく、前述の実行委員会やJRの関門キャンペーンあるいは種々の旅行企画PRの中で、特異な食材としての「ふく（ふぐ）」を取り上げてきたことが影響していると思われる。

2004（平成16）年には、NHKドラマ「武蔵」放映後の反動や対岸の門司港レトロ地区で開館2年目を迎えた「海峡ドラマシップ」や「鉄道記念館」のオープン効果の減少、および、韓流ブームによる海外への観光客増加などが影響して幾分減少を見ているが、2005（平成17）年にはまたしてもNHK大河ドラマで「義経」が放映されていることで、賑わいを取り戻しているという。

これまでのハード整備やソフト事業の実施状況及びその効果と成果を見てきて、観光振興策のさまざまな取り組みが呼応し合い、海峡を中心に観光客誘致が功を奏し、幾分かは観光振興の重要性が地域内で認識され始めているといえる。しかし、JRキャンペーンやNHKドラマ放映後の反動を超えて、これまでの追い風を途切れさせ

ずに今後どこまで継続的に観光での地域振興が図れるか、不安材料も抱えている。

観光振興課では、今後の課題として、「歴史・海峡・食」や「歴史を遊ぶ」などをテーマとしたテーマ性のある観光ルートの確立、門司港・唐戸地区・火の山地区・長府地区を結びつける回遊性を高める滞在型観光、合併後の広域を見据えた観光ルートづくり、あるいは、市民一人ひとりのホスピタリティの醸成や観光産業としての認知の広がり、などを挙げている。以前に比べ、「寸劇事業」や「海峡レンタサイクル」を含め、モデルコースで案内する「関門おもてなしガイドブック」も作成するなど、「しものせき観光キャンペーン実行委員会」によるさまざまな観光イベント企画を実施し、ソフト面の強化を図ることに随分と熱意を示すようになってはきたが、長期間懸案となっている観光ルートの設定や体験交流型のニーズへの対応、国際観光・交流の促進、および北九州市と連携した取り組みの明確化といったソフト面の更なる拡大強化、あるいは、移動手段の整備をはじめ、観光施設や宿泊施設の整備充実といったハード面の不備の解消など、本格的に踏み込んだ一層の取り組み方策が求められている。

3. 下関地域における地域資源の掘り起こし作業の展開

(1) 取り組みの背景

2001年7月に赴任してきた下関郵便局長濱田秀勝氏が、財団法人下関21世紀協会の機関紙「しものせき21」のコラムエッセイ「シリーズ下関にひと言」の中で次のように述べている⁹⁾。

「下関市は全国的にみても誇るべきものが多く存在しているにもかかわらず、市民のみなさんが必ずしもこれを誇りとして自覚されているとは見えず、これを街の発展や観光にも生かされているようには見えません。何故か、下関を語るとき『過去形』で語られる場合が多い」と。私も下関市立大学に勤務するようになって10年以上経過している。これまでに、縁あって下関市に勤務するようになった者たちから、下関在住の市民に対してそのように語るのをよく聞いてきた。

次いで、氏は次のようにも述べている。

「私が最もショックを受けたのは『他県(市)から下関市に来られた人に対して、下関をどのように紹介するのですか』と質問したとき『下関は、昔は素晴らしく発展し、活気のある栄光の街であった。今ではご覧のとおり、人口はどんどん減少し、寂れて行って、活気のない街ですよ』と言う話を聞いた時である」と。市民が下関を語る場合に、現状の恵まれている面よりも「栄光の昔に比べて今は……」という風に、「過去語り」が多いように感じられるのである。

下関市民の「下関エリア」に対するイメージが、全国から見たイメージと大きなギャップを示すアンケート調査結果がある。図-3は、2002年度に行われた「『下関ブランド』による地域振興方策調査」の中で、「下関エリア」が全国でどのようなイメージ捉えられているか、「下関エリア」の産品がどの程度、周知・認知されているかを調べるために、アンケート調査を行った結果の一部である¹⁰⁾。

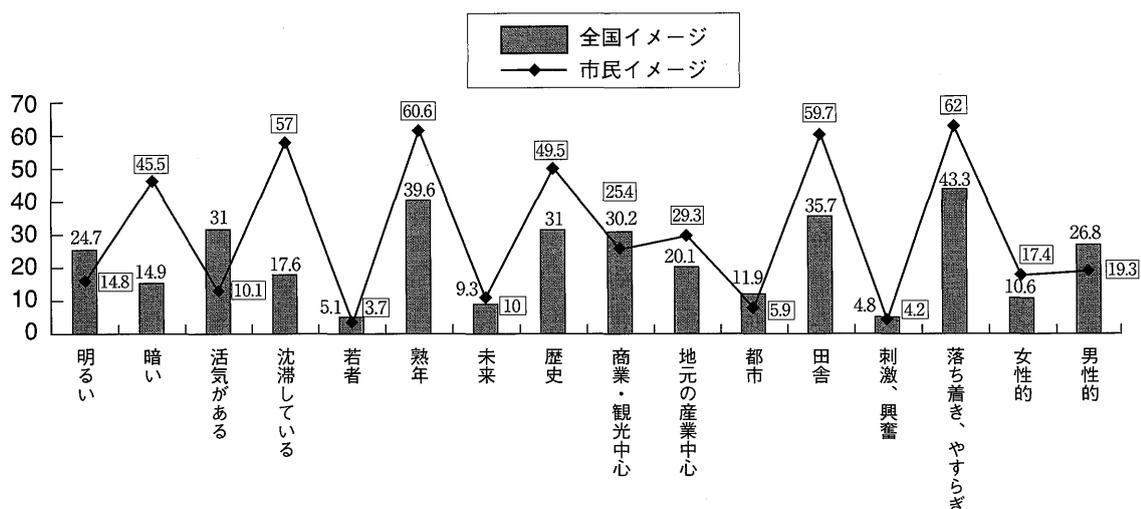


図-3 下関地域のエリアイメージ

表一3 問 あなたは、「下関地域」についてどのような印象、イメージをお持ちですか。

1)～8)それぞれについて①～⑤のいずれかに1つだけ○をお付け下さい。

A	Aに近い	ややAに近い	わからない どちらでも ない	ややBに近い	Bに近い	B
1) 明るい	①	②	③	④	⑤	暗い
2) 活気がある	①	②	③	④	⑤	沈滞している
3) 若者	①	②	③	④	⑤	熟年
4) 未来	①	②	③	④	⑤	歴史
5) 観光・商業中心	①	②	③	④	⑤	地元の産業中心
6) 都市	①	②	③	④	⑤	田舎
7) 刺激、興奮	①	②	③	④	⑤	落ち着き、やすらぎ
8) 女性的	①	②	③	④	⑤	男性的

全国他地域消費者意識調査はホームページ上のネットリサーチで(2002年8月実施、有効回収数2,069件)、また、下関市民には手渡し配布・手渡し回収で(2002年9月実施、同358件)行い、表一3に示す5段階の問い¹¹⁾に答えてもらった割合(%)のうち、「わからない、どちらでもない」の部分を除いたAに近いかBに近いかにつき、それぞれ両端を合計した割合を、全国からのイメージは棒グラフで、下関市民のイメージを折れ線グラフで示している。

このグラフについて、報告書は、全国から見た「下関地域のエリアイメージ」は、「やすらぎやノスタルジーを感じさせる大人の“いやし”の場」と集約される、とまとめている。また、女性的より男性的イメージがやや強いのは、地場産業である漁業のイメージや歴史上のイメージ(源平合戦、巖流島、明治維新など)によるものであると考えられる、とも¹²⁾。

このグラフで目立つのは、全国と下関市民との間で下関のイメージに隔たりが生じている点である。つまり、「明るいー暗い」・「活気があるー沈滞している」のところで両者間のイメージが逆転してしまっている。全国からも下関市民からも、下関は「落ち着きやすらぎを感じさせる」、「歴史のある」、「熟年イメージの強い」、「牧歌的なエリア」ではあるが、その上でなお全国からは「明るさや活気もある商業・観光都市である」と見られているのに対し、下関市民からは、「暗く沈滞している」、どちらかと言うと、「商業・観光都市」よりは「地元の産業中心の都市である」と見られているのである。自分達が住まう地域のことは、自分たちがよく知るゆえに、評価が厳しくなりがちである。そういう面があるにしても、ここでの逆転したイメージの現れ方は、やはり極端であり、自分の地域にあまりにもマイナスイメージを抱いてしまっているように思われ、先述の郵便局長濱田秀勝氏の、下関市民が自らの住まう場所を否定的に語りがちな話と符合している。

そして、氏の下関市民への呼びかけの次のような思い¹³⁾が、2002(平成14)年5月31日の「下関の誇り百選」実行委員会立ち上げにつながっている。

<あなたの街の誇りは何ですか。下関にある「日本一のもの」「世界一のもの」「下関が発祥の地であるものや、ここが最初であるもの」をいくら知っていますか。すらすらと10件以上すらすらと答えられる人が少ないのはどうしてでしょう。これほどに、豊かな自然に恵まれ、縄文・弥生時代からすべてに時代に第一級の歴史的遺産があり、多くの偉大な文化人を輩出した都市は、日本中にどれだけあるでしょう。武家社会(政治)の始まりと終焉といった日本の歴史の大きな転換期全てに関わってきていることは、下関(馬関)の地が歴史上重要な位置を占めていたからに他なりません。明治維新も下関抜きには考えられません。下関では、教科書に頼らずとも、ほとんど全てに時代のことが、現地において現場や現物を見ながら教育ができます。今年(2002)は赤間関市から「下関市」に市名を改称して100周年¹⁴⁾となる記念すべき年に当たる。この記念すべき年であると同時に21世紀の初めということもあり、今一度、下関の良さを見直し、先人の功績を掘り起こし、「下関の誇り得るもの」を下関市民の皆さまから募り、これを後世の人に下関の財産として残して行くことは、意義深いことではないでしょうか。次の22世紀には、どれだけそのような「誇り得るもの」が増えているのでしょうか。>

過疎化や少子高齢化の進展に伴う、より衰退に向かうであろうことが予想される地域社会において、定住人口の拡大による地域振興がもはや望めない中では、交流人口の増加を、これからの地域活性化の一つの戦略として設定せざるを得ない。そのとき、どの地域であれ、地域の資源を掘り起こし、再評価し、磨くことの必要に迫られる¹⁵⁾。郵便局長の呼びかけの背景にある下関地域の取り組み方に対するもどかしさは、下関に関心を抱く多くの者にとっての共通認識になっているのだが、それは以上のような現下の動向の状況認識とも決して無縁ではないと考えられる。

(2) 下関21世紀協会におけるまちづくりの取り組みの経緯

下関21世紀協会は、ひところの繁栄を誇った下関が、時代の変化と共に地域経済の低迷期に入っていた20年前の1985年に、その低迷期に色濃く漂わせていた閉塞感を打破しようと、地域の活性化・発展を願う有志・若者が、行政・企業・団体の各セクターを結集し発足した財団法人である。行動理念として、「海の多面的な利用」、「国際化」、「豊かな文化と明るい生活環境」の3つの柱を立て、住民、行政、経済界が一体となって、「小さな世界都市・下関」を目指し、自ら「行動するシンクタンク」と称して、草の根的に行動を起こす、としている。

「小さな世界都市・下関」とは、1981年に発表された国土庁と下関市との共同調査「国際化に対応した地方都市の整備方策に関する調査」の第2回調査報告書の中で用いられた言葉で、ひところ下関市をはじめ(社)下関青年会議所などの団体においてもよく使われてきた。すなわち、下関市が国際社会の一員としての独自性を発揮し、国際社会とダイレクトなチャンネルを持ち、日本の一地方都市にとどまらない自覚とともに、下関の特性を活かし、個性化を図り、人、物、金、情報の交錯する国際交流拠点都市として「小さな世界都市・下関」を形成することが、国際化に対応する基本方向である¹⁶⁾、という高い理念を謳ったものである。

下関21世紀協会は、この間進捗を見たウォーターフロント開発に関してさまざまに提言を行い、恒例の事業として、対岸の北九州市や門司の市民グループと連携して海峡花火大会開催を継続し、数年前まで続いた下関都市景観シンポジウムをリードしてきた。また、最近のまちづくり活動の一つである「下関花いっぱい計画」による市民参加による国道沿いの花壇づくり事業は、手づくり故郷賞などのいくつかの表彰を受けている。

草の根的な事業を展開しながら、現在は「下関の活性化と発展を願って、ひとの想いを結集し、海峡と歴史と文化を活かした海峡文化都市下関を創出するために、理念の形成と実践を通じて下関のまちづくりに積極的に参画し、文化の薫りに満ち、活力と魅力あふれる下関を目指して活動する」として「人の想いを結集し、まちの輝き、まちの幸せを創出するために」を方針に掲げ、地域の個性を活かしたまちづくり活動を積極果敢に進めている。

さらに、1991年からは一貫して「下関地域中核都市づくり事業」を展開してきている(表-4)。

表-4 21世紀協会が行ってきた下関地域中核都市づくり事業の経緯

回	年度	テーマ	内容
1	1991	21世紀のこどもたちへの贈り物	銀行頭取による講演
2	1992	高校生からのメッセージ-下関地域に望むこと	1市4町からの高校生による討論
3	1993	中核市の形成をめざして-下関地域の現状と未来	1市4町の助役によるパネルディスカッション
4	1994	若者が本気で考える下関地域の未来・ライブ・アンケート100	1市4町の高校生5,000人アンケートを基に高校生のディスカッション
5	1995	中核都市の形成をめざして-合併に学ぶ未来都市づくり	講演パネルディスカッション
6	1996	ふるさと再発見	バスツアー
7	1997	ふるさと再発見	バスツアーパート2
8	1998	豊関地域の広域ネットワークを作るには-地図を通してみる地域連携	下関市立大学吉津教授による講演
9	1999	今こそ地域連携-まちづくりマップづくりによるまちおこし、地域連携の推進	パネルディスカッション「広域連携をめざして-地域女性の主張」
10	2000	①マップから見る広域資源の活用と有効利用 ②市町村合併について	下関市立大学 吉津教授による講演 山口県市町村課 岡田美氏の講演 「豊関友遊物語」「豊関友遊マップ」作成配布
11	2001	豊関地域における循環型社会構築への広域連携	下関市立大学 坂本教授による講演とパネルディスカッション「私たちの環境への取り組み」
12	2002	10年ひと未来-共に創ろう私たちのまち	早稲田商店街安井潤一郎氏の講演「いのちのまちづくり」とパネルディスカッション
13	2003	「豊関の誇り100選」発表会	歴史家 清永唯夫氏による講演「広域的な魅力づくり」
14	2004	豊関広域観光戦略プロジェクト「ふうどin風土~食と緑のふるさとツーリズム	新観光戦略の提言とホームページ「ふうどin風土」(http://fuudo.jp) 開設
15	2005	人口減少下の地域づくり-豊かな地域社会づくりへの挑戦	講演とシンポジウム等(下関市立大学と共同で、脚注23に同じ)

行政担当者、学識経験者、高校生、女性、あるいはまちづくり人など専門家や市民各層を招き、そして広く呼びかけながら、講演やパネルディスカッションおよび調査事業等を継続し、一貫して市町村合併への対応策を含む広域連携のあり方を探求・模索してきたプロセスがうかがえる。その経緯の中で、最近に至っては、地域資源の掘り起こし作業、マップづくり運動、さらには新たな観光戦略を求めて、地域資源や各地の人材を結びつけ合う地域間ネットワークへと歩みを進めている。

そのような流れの中で、CD-ROM『わたしたちが選ぶしものせき《誇り100選》』（制作2002年12月）、DVD『女性が選ぶ関門海峡の誇り100選』（同2004年）およびCD-ROM『わたしたちが選ぶ豊関の誇り100選』（同2004年5月）という地域財産発掘事業の展開があったのである。

(3) 「下関の誇り100選」

「下関市が有する比類なき文化遺産を改めて市民の手により、発掘・選出・整理・顕彰し、そのソフトの戦略的活用方を提案・実施することにより、郷土愛の醸成と下関市活性化の推進を図ること」¹⁷⁾を目的に、2ヶ月ほどの準備期間（主として下関郵便局と(財)下関21世紀協会との数回の打ち合わせ）を経て、2002年5月31日に「下関の誇り100選」実行委員会（委員長は、安成信次下関21世紀協会理事長）を発足させている。その前提には、郵便局長の呼びかけにある通り、「交流人口の増加が下関市活性化への一つの戦略であるならば、観光人口の増加策はその大きな柱であるが、では全国に誇りうる下関の様々な宝を十分に認識・活用しているといえるか、また、外に向かってそれらを発信するとき、私たち市民はこの街に対して、十分な認識と誇りを持ちえているだろうか」¹⁸⁾という市民への問いかけがあった。

下関市の市名誕生100周年を機に、幅広く市民各層に下関市における「日本一世界一・初・唯一」等の「もの・こと」、歴史上の主要な出来事、著名な人物や名産品など、郷土の誇りになるものの募集をかけ（募集期間は7月中の1ヶ月間）、その中から100点を選び、年度内に小冊子や地図にまとめて発表し、データベース化して観光客誘致などに活用しようというのである。最終的に選考した内容は成果物としてCD-ROMに仕上げている。

実行委員会のメンバーには、事務局を担当する下関21世紀協会を中心に、下関商工会議所や青年会議所、市連合婦人会、市連合自治会、市文化協会など市内の主要団体、観光関連では下関観光コンベンション協会をはじめ、長府や吉田の観光協会、旅館協同組合、飲食組合など、さらに、下関デザイン協会や山口県建築士会下関支部などの設計関係のほか、まちづくり団体としてNPO発憤の会、そして、JR下関駅や市内郵便局なども、また市役所からは教育委員会と広報公聴課が加わり、20近い団体が参加している。下関市長も名誉会長として名を連ね、市内の主要組織のほとんどといってよいほど多数の団体が結集し、取り組み趣旨に賛同する者の多い、これを機に市民相互の交流が盛んになることを予感させるような、市民による市中挙げての大きな事業となった。

おおよそのデータベースのフレーム作りを行って後、要領を決め、応募の作業に入っている。市報はもとより、新聞やコミュニティFM、タウン誌等のマスメディアおよびホームページも活用して周知徹底を図りながら、ポスター（80枚）を貼り、応募用ハガキ付の「下関のすごいモノ・コト大募集」と題したチラシ（10,000枚）、小中学生向けには別な応募はがき（22,000枚）を用意して配布、インターネットによる応募も実施している。応募対象の基本は下関市民だが、「下関に関心のある方」は誰でも応募できるとし、また一人当たりの応募件数についても制限を加えてはいない。

1ヶ月余りの募集の結果、小中学校から2,648、一般の応募はがきによるもの149、インターネット19件、その他9件の計2,825通が寄せられた。応募終了後、ジャンル別の仕分け作業を行って、9月の第4回実行委員会の折には約170件を選んで各委員に報告、委員による埋もれたデータにもチェックをかけ、外部の識者からの監修も受けて、11月下旬までに段々と100近くに絞り込み、その過程で、選ばれた項目の解説文の作成や確認、必要と考えられる写真等の収集、および地図上での場所の確認等の作業を進め、年末にかけては、翌2003年1月23日の発表会に向けての準備に入っている。当初の計画では、11月に選考結果の発表を行う予定であったが、選考の難しさや内容の確認、および、CD-ROM制作などの作業でずれ込んでいる。発表会当日に頒布できるまでにCD-ROMを完成させるには、相当煩雑な作業が続いていたものと思われる。

102件までに絞り込まれたものの一覧表を次ページ以下に示している（表-5）。CD-ROM「しものせき『誇り100選』」では、7つのジャンル別にリストアップされ、場所が特定される35件については位置を示す地図一覧もあり、アクセスしやすく、1件毎には写真と説明が加えられ、わかり易く、親しみがもてるように工夫されている。ちなみにジャンル別には「下関が発祥のもの」9件、「日本初のもの」33件、「下関にある世界一日本一のもの」21件、「下関にしかないもの」4件、「歴史上の出来事」9件、「下関ゆかりの人物」19件、および、「その他、下関で誇りに思うもの」23件が挙げられている。合計すると118件になるが「日本発」と「ゆかりの人物」など、複数のジャンルに属するものがあるためである。

発表会は、会場の海峡メッセの国際会議場を満席にするほどの参加者があり盛況であった。その場では女子高校生の朗読を交えての、CD-ROMの100選の内容をビデオで再編集した映像による成果の発表があった。発祥のものや日本一のもの、かけがえのないもの、歴史的な出来事が、次から次へと映し出され、下関にはいかに誇りにできるものが多いか、いかに豊かな

要素あるいは条件を持った土地柄であるかを誰もが再認識させられ、あるいは、次のステップへの可能性を感じさせるようなある種の熱気にも満ちていた。発表会の後、早速新聞社からは100選の連載記事の申し出もあり、この広く市民に呼びかけるという手順を踏んだ下関の地域資源発掘の事業は成功であったと思われる。

表一五 「しものせきの誇り100選」 入選作一覧

名 称	概 要	年 代
大洋ホエールズ	横浜ベイスターズ(大洋ホエールズ) 球団発祥の地	1949年(昭和24年)
勝山御殿跡	日本最後の城。日本一のスピード築城	1863年(文久3年)
連合婦人会	日本初の全市規模の婦人会結成	1903年(明治36年)
日本銀行下関支店	日本銀行の支店として2番目に古い	1893年(明治26年)
うに	ウニのアルコール漬け発祥の地	1871年(明治4年)
小月庚申塚	日本一大きい庚申塚	江戸時代
市政施行	日本で最初に市制を施行した	1889年(明治22年)
市名改称	日本で最初に市名を改称した。	1902年(明治35年)
彦島杉田岩刻画	ペトログラフ	古代
床屋発祥の地	床屋発祥の地	鎌倉時代中期
下関南部町郵便局	日本一古い現役郵便局舎	1900年(明治33年)
関釜間船内第一郵便局	日本初の船内郵便局	1905年(明治38年)
赤い丸型ポスト	赤い郵便ポスト発祥の地	1901年(明治34年)
藤本(中上) 英雄	日本プロ野球初の完全試合達成	1918年～1997年
高杉晋作	奇兵隊創設者	1840年～1867年
伊藤博文	日本最初の総理大臣	1841年～1909年
金子みすゞ	下関で活躍した童謡詩人	1903年～1929年
二村 定一	日本発のジャズシンガー	1900年～1948年
乃木希典	明治天皇の殉じた軍人	1849年～1912年
田中絹代	邦画史上最高の女優	1909年～1977年
白石正一郎	奇兵隊の創設の尽力	1812年～1880年
木暮 実千代	下関出身の女優	1918年～2000年
耳無芳一	下関が舞台となった有名な怪談	江戸時代
滝川弁三	日本のマッチ王	1851年～1925年
国司 浩助	世界初のディーゼル・トロール漁船を開発	1887年～1938年
林 芙美子	下関で生まれた文学者	1903年～1951年
藤原義江	世界的なオペラ歌手	1898年～1976年
狩野芳崖	日本画の復興に尽力	1828年～1888年
諸葛信澄	近代教育を広める	1849年～1881年
松田優作	不滅の特異派俳優	1949年～1989年
永富独嘯庵	日本で初めて製糖事業を創立	1732年～1766年
伊藤梅子	日本初のトップレディ。伊藤博文の妻	1848年～1924年
鯨館	世界唯一のシロナガスクジラの実物大模型	1958年(昭和33年)
桜山神社	日本発の招魂社	1865年(慶応元年)
六連島灯台	日本初期の洋式灯台	1871年(明治4年) 11月
胸けん(土笛)	日本初出土の弥生時代の土笛	1966年(昭和41年)
海底鉄道トンネル	世界初の海底鉄道トンネル	1942年(昭和17年)
旧山陽トンネル	日本で最初のステーションホテル	1902年(明治35年)
関門鉄道連絡船	車両航送発祥の地	1909年～1942年
彦島金毘羅宮の階段	日本一急勾配の医師団	1819年(文政2年)

金ノ弦岬灯台	日本初の海上標識	1871年(明治4年)
旧下関英国領事館	領事館としては現存最古の建物	1906年(明治39年)
春帆楼	ふく料理の店 第1号	1888年(明治21年)
巖流島の決闘	日本で最も有名な決闘場所	1612年(慶応17年)
住吉神社本殿	国宝 本殿	1370年(応安3年)
中山神社	幕末の青年公卿中山忠光をまつる。	1928年(昭和3年)
功山寺仏殿	国宝 仏殿	1320年(元応2年)
関門国道トンネル	世界初の海底国道トンネル	1958年(昭和33年)
満珠・干珠島	公的に2つの名を持つ珍しい島	
数方庭祭	奇祭	
忌宮神社	長門の国二の宮で式内社	728年
蓋井島・山ノ神神事	日本初の重要無形文化財(民俗文化財)指定	1959年(昭和34年)
綾羅木郷遺跡	全国でも稀な緊急指定された史跡	弥生時代・1969年(昭和44年)
東行庵	高杉晋作墓所	1884年(明治17年)
赤間神宮	西日本唯一の御陵	1940年(昭和15年)
大歳神社	源義経必勝祈願の地	
中部銀次郎	日本アマチュアゴルフ選手権で最多6度の優勝	1942年～2001年
南風泊市場	天然河豚の水揚げ高日本一	1974年(昭和49年)
維新・海峡ウォーク	日本最大の(単日開催)ウォークラリー形式イベント	1986年(昭和61年)
亀山八幡宮	現存する鳥居の中で日本一の大きさ	1933年(昭和8年)
ふくの銅像	日本一大きいふくの銅像	1990年(平成2年)
彦島水門	海と海を結ぶ、日本最小の閘門(ごうもん)式運河、超ミニサイズのパナマ運河	1936年(昭和11年)
蚕種渡来の地	日本で初めて大陸から蚕種の技術が伝わった地	195年
蓋弓帽(がいきゅうぼう)	日本で初めて発見された金メッキの古代装飾具	弥生時代中期
旧秋田商会ビル	日本最初の屋上庭園	1915年(大正4年)
私立梅光学院	私立高校としては日本最古の部類の学校	1914年(大正3年)
馬関祭り	下関を代表する祭りのひとつ	1974年(昭和49年)
スーパージャンボふく鍋	日本一大きいふく鍋	1986年(昭和61年)
近代捕鯨の基地	日本最初の近代捕鯨	1899年(明治32年)
ラジアルタイヤ	世界一大きなタイヤの製造	
関釜フェリー	日本唯一の毎日就航している国際フェリー	
関門海峡花火大会	県を異にする市が共同で開催	1986年(昭和61年)
関門景観条例	二市で制定した同一名称・同一条文	2001年(平成13年)10月3日施行
野菜の輸入量	港での野菜輸入量日本一	
火の山からの展望	下関を代表する景観	
海峡七路	海峡を渡る手段。	
花魁	花魁・芸者発祥の地	
長府城下町	昔のたたずまいが感じられる	
蓋井島灯台	日本で最初の風力発電装置(灯台用)が設置された灯台	1951年(昭和26年)
唐戸市場	生産者が販売できる、全国でも稀な市場	1933年(昭和8年)
長門鑄銭所跡	和同開珎の鑄造所	708年(和銅元年)
毘紗ノ鼻	本州最南端の地	
壇ノ浦の合戦	平家滅亡の戦い	1185年(寿永4年)
長州砲	外国との戦争に使われた日本製の大砲	1863年(文久3年)
赤間関硯	硯で初めて無形文化財指定	鎌倉時代
日清講和条約調印の地	明治時代の国際会議と講和条約締結の地	1895年(明治28年)

関門海峡	日本一狭い海峡	
先帝祭	無形民俗文化財	
奇兵隊	日本で最初に武士以外の入隊を認めた軍隊	1863年(文久3年)
海響館	展示される「ふく」の種類では世界一	2001年(平成13年)
海峡ゆめタワー	世界初、展望台が球型総ガラス張り。	1996年(平成8年)
「ふく」の街		
みなと新聞	日本一の全国ネットワーク網	1946年(昭和21年)
平家踊り	下関を代表する郷土芸能	
佐村福槌夫妻	航空界、洋装界功労者	大正時代
北前船と水先案内	西廻り航路	江戸時代中期から明治時代前期
お軽(かる)同行	真宗の三同行の一人	1801年～1868年
山口労働金庫下関支店	世界最初の免震建物	1934年(昭和9年)
潮流信号・船舶通航信号所	日本最古の潮流信号・船舶通航信号所	1909年(明治42年)
壇之浦導灯	日本最古の導灯	1901年(明治34年)
唐戸亀屋薬局	日本最古級の現役薬局	江戸時代初期
高尾浄水場	現役最古の緩速ろ過浄水場	1906年(明治39年)

しかし、計画段階で目論まれたような、データベース化の次のステップにおける「市民の郷土愛の醸成に資する利用」や「下関市の交流人口増加策と観光戦略に関する利用」の実行、つまり、まとめ得たCD-ROMを今後、観光戦略や啓発活動にどのように結びつけるか、あるいはいかに活用するか、については、関係する組織や諸団体との意向や取り組み方針についての確認や調整が必要となるゆえに、そう容易なことではない。また、むしろあり過ぎる位に溢れている下関が誇りとするモノ・コトをどのように絞り込み、組み合わせて、観光ルート化等に向けてセットするかは重要な作業ではあるに違いないが、これまで同様にその手がかりを見出すことすら難しい課題でもある。

だからであろう、実行委員会の事務局を直接的に担当した21世紀協会・海峡都市活性化研究部会のメンバーは、部会報告の中で「この『下関の誇り100選』を埋もれさせることなく市民に等しく認知していただくことを当面の課題としていきたい」¹⁹⁾と表明するに止まり、その後同様の事業が別な領域で進められることになり、それが次年度の「関門の誇り100選」や「豊関の誇り100選」に引き継がれるのである。

(4) 「女性が選ぶ関門海峡の誇り100選」

「女性が選ぶ関門海峡の誇り100選」は、「関門両市に住む女性が一緒に風景を選ぶことにより、関門海峡についての共通認識も芽生え、女性が自分たちの住んでいる関門海峡が素晴らしい風景を持ち、得がたい歴史的遺産が、水産資源がそこにあることを再認識し、自分たちが住む関門海峡、港まちを愛する心を育てるよい機会になると考え」²⁰⁾、女性が応募し女性が選ぶという女性の視点を全面的に打ち出し、なおかつ、市民団体と港湾行政との協働事業として取り組まれた。

企画・運営の主体である検討委員会には、まちづくり活動のNPO法人を中心に、両市の代表的な市民団体である門司まちづくり21世紀の会と(財)下関21世紀協会が加わり、行政からは港湾専門部局である、九州地方整備局北九州港湾・空港整備事務所、同下関港湾事務所、同関門航路事務所、および両市の港湾局が加わっている。検討委員会の立ち上げは2003年10月16日。翌年6月23日までに8回の会合を重ね、応募(募集期間は2004年3月1日～4月10日)された301件の中から104件を選出し、7月17日の成果発表会までに入選作で構成されたビデオを作成し、後にDVDに仕上げている。公募方法から選定、さらに成果を何らかのメディアツールにまとめるという手順や方法については、『下関の誇り100選』の時のやり方をほとんど踏襲している。

なぜ女性なのか、定かでない面もあるが、地域資源の発掘に別種の趣きを期待していたように思われる。「女性だけのとっておきの関門海峡大募集」と題された料金後納はがき付きのチラシ(両市で約3万枚配布)には、NPO法人「九州キラキラみなとネットワーク」大谷鮎子理事長の次の呼びかけ文が付されている。

「女性は日ごろから、情報収集が豊富で好奇心旺盛、感性も豊か。今まで気付かなかった誇りに思う『ひと・もの・こと』がたくさんあるのでは?これまでの名所、名物もちろんのこと、『へー』とか『なるほど』とか、『やっぱり』とか、女性の感性で選んだキラリと光る一粒一粒をつなぎ合わせた、素敵なおネックレスのような『関門海峡の誇り100選』の誕生を期待しています」と。

「思い出に残る」、「未来に伝えたい」、「心が癒される」をキーワードに、関門海峡の自然・歴史・文化・社会・人に関して、最終的には301通の応募があり、それらからの絞込み審査は、1件毎に検討を加えながら、推薦された女性市民両市から3名ずつの計6名の審査委員によって行われた。また、募集の中で洩れていると考えられる項目については検討委員会から30点の推薦を受けている。そして、表-6に示す104件(下関側47件、北九州側51件、海峡を共有するもの6件)が100選として決定された。

表-6 「女性が選ぶ関門海峡の誇り100選」入選作一覧

地域名	項目	地域名	項目	地域名	項目
下関1	赤間神宮	下関36	旧山陽ホテル	北九24	喜多久海岸の風景
下関2	先帝祭	下関37	関釜間船内第一郵便局	北九25	和布刈塩水プール
下関3	源平の合戦	下関38	関釜フェリー	北九26	和布刈公園
下関4	平家踊り	下関39	潮流信号・船舶通航信号所	北九27	和布刈神社
下関5	馬関まつり	下関40	維新・海峡ウォーク	北九28	門司ヶ関祉(神社一の鳥居付近)
下関6	高杉晋作	下関41	梅光女学院	北九29	門司港レトロ地区
下関7	日清講和条約調印の地	下関42	田上菊舎	北九30	バナナの叩き売り発祥の地
下関8	国宝功山寺仏殿	下関43	長府城下町	北九31	門司港駅
下関9	青春交響の塔	下関44	六蓮島	北九32	門司港ホテル
下関10	みもすそ川公園	下関45	日和山公園	北九33	門司郵船ビル
下関11	旧秋田商会ビル	下関46	東行庵	北九34	大連上屋
下関12	旧下関英国領事館	下関47	赤間硯	北九35	田ノ浦倉庫
下関13	下関南部町郵便局	北九1	出光美術館	北九36	響灘風力発電
下関14	高橋是清と是清の書	北九2	洞海湾の沖仲仕ごんぞう	北九37	東田第一高炉
下関15	乃木希典	北九3	海峡ドラマシップ	北九38	竹久夢二
下関16	満珠・千珠島	北九4	風師山	北九39	火野葦平
下関17	忌宮神社	北九5	合唱組曲「北九州」	北九40	無法松の碑(富島松五郎)
下関18	国宝住吉神社本殿	北九6	カボチャドキヤ国立美術館	北九41	中村汀女
下関19	彦島	北九7	九州鉄道記念館	北九42	松本零士
下関20	海沿いの要塞跡	北九8	清滝・三宜楼の石段・錦町	北九43	松本清張
下関21	火の山からの展望	北九9	軍馬の水飲み場	北九44	佐木隆三
下関22	南風泊市場	北九10	白島展示館(若松)	北九45	わたせせいぞう
下関23	ふくの銅像(亀山八幡宮)	北九11	白野江植物公園	北九46	森鷗外旧居
下関24	近代捕鯨発祥の地	北九12	新門司北エリア(新門司海浜公園)	北九47	林美美子
下関25	海響館	北九13	曾根干潟(小倉)	北九48	エルナードと若松バンド
下関26	海峡ゆめタワー	北九14	大里宿(長崎街道)・大里公園	北九49	若戸大橋
下関27	江戸市場	北九15	手向山公園	北九50	高塔山公園
下関28	江戸栈橋ボードウォーク	北九16	戸の上山系(大台ヶ原)	北九51	淡島神社
下関29	巖流島	北九17	ノーフォーク広場	海峡1	籠の渡し(ヒヨドリ)
下関30	巖島の大太鼓	北九18	日明・海峡釣公園	海峡2	海峡七路
下関31	金子みすず	北九19	豊前一粒牡蠣	海峡3	関門トンネル
下関32	田中絹代	北九20	部埼灯台・僧「清虚」の像	海峡4	関門航路を行きかう船
下関33	藤原義江・紅葉館(記念館)	北九21	古城山(門司城跡)	海峡5	関門海峡花火大会
下関34	古川薫	北九22	平和パゴタ	海峡6	関門橋
下関35	金ノ弦岬灯台	北九23	門司みなと祭・大里電照山笠		

発表会には120名が参加。感想を求めたアンケートによると、「100選をどう展開するのか」、「目的がよく分からない」との期待を含めての問題提起もあったが、関門地域には多くの見所、味わい所があることを誰もが改めて認識できた風であった。

何よりもこの事業では、港湾行政と市民との間で、議論し合う機会が得られ、特に地元民ならではの海峡空間への触れ合い方、親しみ方が相互に認識されることによって、協働の取り組みがいくらかでも達成でき、今後のみなとまちづくりへの一つのきっかけをつくったことが、収穫の一つなのかもしれない。

その後、成果の継続として、8月7日から読売新聞夕刊(地方版)で、この100選を活用して「女の関門百選」と題して連載されている。しかし、今回の日常生活とも結びついた女性からの柔らかな視点が織り込まれた魅力発掘の作業により、関門海峡には、ひいては北九州・下関両市にまたがって、あふれんばかりにさまざまな要素があることが確認されたのだが、これらの要素を地域づくりにどのように活かし、磨き合って行くかについては、また、このような事業を機に、九州・下関両市の市民の間でまちづくりの協議ができるようになれば、2004年8月から届出が始まっている関門景観条例運用のバックアップに結びつくと思われるが、そのような体制づくりについては、今後の課題としてまだ残されたままである。

(5) 「豊関の誇り100選」

「豊関の誇り100選」事業は、これまでの二つの100選事業と同様のやり方で、下関21世紀協会が1991年来進めてきた前述の「下関地域中核都市づくり事業」(表一4)の一環として、2003年度の山口県と豊関1市4町の助成による「若者チャレンジ事業」の中で、また、それまでに豊関1市4町の広域の交流・連携を図るべく作成してきていた「豊関友遊物語」・「豊関友遊マップ」の改定事業として位置づけられている。

さらに、2003年3月26日には「下関市・豊浦郡4町合併協議会」が設立され、2005年の合併に向けて5月からは「新市まちづくり構想」の策定作業等の検討・協議が始まっている中、市民サイドから、豊関地域にあるすばらしい地域資産を共有することにより地域住民のさらなる郷土愛と一体感の醸成を図り、豊関地域活性化の推進に貢献しようと、意図されたものでもあった。

趣旨に、次のように述べている。「豊関地域は、他に類を見ないほど誇りとするものの宝庫である。この誇り(財産)を住民により選定し、地域住民の郷土愛と共有の財産としての認識による一体感の醸成を図り、さらに、学校教育にも利用し、観光資源の発掘に結びつけ、交流人口の増加による地域活性化を推進するもの」と。

4月25日に立ち上げられた実行委員会(豊関地域中核都市推進実行委員会、委員長:原和人下関21世紀協会理事長)は、下関21世紀協会を主管として、1市4町の9団体(21世紀協会の外、下関青年会議所、下関青年会議所青年部、下関市連合婦人会、下関市女性団体連合協議会および4町から女性団体協議会、母親クラブ消費者の会など団体の代表)と1市4町の行政からのオブザーバーによって構成された。募集期間は、7月下旬から8月31日まで。今回豊浦郡内を対象に4町各々に、「日本一・世界一のもの」、「発祥のもの」、「歴史上の出来事」、「ゆかりの人物」、「(自分の町以外の)豊関地域で知っていること」(他町の分も推薦できる)および自然・景観等の「その他」の6ジャンル別に、料金後納扱いのはがき付きチラシを4町全戸(約2万世帯)に配布し、さらに役場・公民館に置いて、募集(インターネットによる応募も可能)をかけている。

最終的には、656人から1,852件の応募があった。集められた題材についてジャンル分けし、項目の内容の確認や検証、補足分の提案、下関の誇り100選との整合性の検討などを含めて、ワーキンググループによる選定作業を行い、実行委員会で決定している。主に「その地域にしかないもの」、「豊かな自然」、「地域の歴史として残したい伝統文化」および「地域ゆかりの人物や産業」などを選定し、結果的に「豊関の誇りになるもの」96件(豊田町21件、豊北町25件、豊浦町28件、菊川町22件)を選考した(内容項目は、次頁以下の表一7に示している)。先の下関の誇り103件と合わせ、豊関の誇りとしては総計199項目に昇ることとなった。

発表会には約200人が参加した。選定された項目を「大陸とのつながり」、「北浦の海岸線」、「渓谷」、「文化・産業」および「歴史」5つのジャンルに分け、また1市4町の各地域別にビデオにまとめて紹介された。それらの内容はその後再編集されてビデオやDVDを制作し、配布また協賛頒布を行っている。自然景観の見所を始め、名所旧跡も多く豊関地域における地域資産の豊富さに参加者は改めて驚いている。発表会当日に基調講演を行った郷土史家の清永唯夫氏によれば、この地域は古くからさまざまに歴史を共有してきたところである。歴史のあらゆる要素を有する各所を訪ねて行けば歴史認識が広がり深まる、そういう風土の特質を持っており、地域資産を共有し誇りに思うことで1市4町が結びつき、個性を伸ばし、一体感が強まる可能性がある、という。

地域資産の内容項目を市民各層への公募を経てデータベースとして完成させ、発表会を行い、ビデオやDVDなどのメディアで公表した後の次のステップ(第2ステージ)として、実行委員会は「豊関地域の交流人口増加策および観光戦略に関する利用、また、地域の小中高校や図書館等の教材として活用し、郷土愛の醸成に資する利用の方法を考え、互いの歴史や文化を認識し合って共通の資産とすることにより、合併後の豊関地域住民の一体感醸成など地域への住民意識を高める」として、書籍、マスコミ等で周知させ、教育教材としてのプログラムを作成し、シンポジウムを開催し、地域特産品の紹介や販売促進、さらには観光促進に活用するなど、100選確定後の展開をさまざまに想定していた²¹⁾。

表-7 豊関の誇り百選一覧

分類	場所	主 項 目	概 要
豊北単体	豊北1	角島大橋	離島に架かる日本一長い橋
豊北単体	豊北2	角島灯台	日本海側初の洋式灯台
豊北単体	豊北3	角島牧崎風の公園	日本海の風を感じる絶景
豊北単体	豊北4	ツノシマクジラ	90年ぶりに発見された新種クジラ
豊北単体	豊北5	角島の献上ワカメ	万葉集にも読まれた
豊北単体	豊北6	中本 たか子	角島生まれの女流作家
豊北単体	豊北7	夕焼けマラソン	角島の夕日を眺めながら走るミニマラソン
豊北単体	豊北8	白滝山	標高668m。山口県に他にはない、ホンジュウジガの生息地でもある。山頂近くに、立派な滝があり、また冬のツララは見事で、山頂は海の展望も開け登山愛好者も多い。
豊北単体	豊北9	附野薬師	日本三大薬師の一つ
豊北単体	豊北10	恩徳寺のムスピイブビキ	大内氏ゆかりの新銘木100選のひとつ
豊北単体	豊北11	田上菊舎	当地生誕の江戸時代の女流俳人
大陸との交流	豊北12	土井ヶ浜遺跡	日本人のルーツを語る弥生人の人骨を出土
大陸との交流	豊北13	人類学ミュージアム	日本初の人類学研究施設
大陸との交流	豊北14	土井が浜古戦場～神功皇后神社	元寇の長門侵攻の跡
大陸との交流	豊北15	五千原古戦場	蒙古兵五千人の戦跡
大陸との交流	豊北16	浜出祭	蒙古来襲時の敵国降伏祈願
北浦海岸線	豊北17	大浦岳森林公園	日本海に沈む夕日が絶景
北浦海岸線	豊北18	二見夫婦岩	伊勢の二見浦に匹敵
北浦海岸線	豊北19	壁島	別名「白壁の島」
溪谷	豊北20	栗野川のアオノリ・シロウオ	香り豊かで深い緑は日本一？
溪谷	豊北21	木屋川・栗野川の分水嶺	日本一低い標高から日本海と太平洋へ
溪谷	豊北22	豊北峽	ホテルが飛び交うキャンプ地
文化・産業	豊北23	旧滝部小学校（歴史民俗資料館）	町の歴史がわかる資料館
文化・産業	豊北24	中山太一	「クラブ化粧品」の創業者
歴史	豊北25	中山忠光	幕末の青年公卿
豊田単体	豊田1	殿居郵便局局舎	殿居郵便局局舎
豊田単体	豊田2	狗留孫山	狗留孫山
豊田単体	豊田3	狗留孫山修禪寺	狗留孫山修禪寺
豊田単体	豊田4	華山	華山
豊田単体	豊田5	華山神上寺	華山神上寺
豊田単体	豊田6	近松門左衛門誕生の地	近松屋敷（近松門左衛門誕生の地）
豊田単体	豊田7	パラ・ハングラライダー・ランチャー台	パラ・ハングラライダー・ランチャー台
豊田単体	豊田8	徳仙の滝	徳仙の滝
豊田単体	豊田9	住宅用太陽光発電システム	住宅用太陽光発電システム
豊田単体	豊田10	一の俣温泉	一の俣温泉
豊田単体	豊田11	長正司公園の大藤柵	長正司公園の大藤柵
豊田単体	豊田12	豊田氏館跡	豊田氏館跡
溪谷	豊田13	豊田湖	豊田湖
溪谷	豊田14	石柱溪	石柱溪
溪谷	豊田15	木屋川のゲンジホテル	木屋川のゲンジホテル
溪谷	豊田16	ホテル舟～ホテル祭り	ホテル舟～ホテル祭り
文化・産業	豊田17	豊田のなし	豊田のなし
大陸との交流	豊田18	矢田遺跡	矢田遺跡
歴史	豊田19	安徳天皇西市御陵墓（参考地）	安徳天皇西市御陵墓（参考地）

歴史	豊田20	浮石義民	幕府の巡見使に直訴。村民が救われた
文化・産業	豊田21	中野半左衛門	天保12年 木屋川の通船に尽力した萩藩の豪商
菊川単体	菊川1	民家	誰もがいとおいしいと想う風景
菊川単体	菊川2	道の駅きくがわ・小日本ふるさと市	ふるさと特産品販売
菊川単体	菊川3	手延素麺	盆地の気候でできた特産品
菊川単体	菊川4	いちご狩り・アイガモ農法	町内一円で体験
菊川単体	菊川5	大迫名水	町に5か所ある名水のひとつ
菊川単体	菊川6	多武ノ峰公園(とうのみねこうえん)	小日本を一望できる桜の名所
菊川単体	菊川7	快友寺	日本一の明版一切経
菊川単体	菊川8	快友寺のイヌマキ巨樹群	目を引く巨樹
菊川単体	菊川9	浅間神社の梵鐘	町の文化財
菊川単体	菊川10	吉賀八幡宮の紙本着色八幡大菩薩	？
菊川単体	菊川11	慈光寺子安観音	大同年間大和の高僧理上人の開祖
菊川単体	菊川12	法輪寺	日本三大菩薩のひとつ
菊川単体	菊川13	仲哀天皇殯葬所	仲哀天皇殯葬の地・長府日頼寺説が有力
菊川単体	菊川14	船越清蔵	幕末清末藩における勤皇志士
大陸との交流	菊川15	上原遺跡	弥生人の遺跡を多数発掘
大陸との交流	菊川16	下七見遺跡出土	ガラス製勾玉の鎔范
溪谷	菊川17	歌野ダム・活用村・展望台	四季おりおりの名所
溪谷	菊川18	歌野千本桜	湖畔にある四種の桜の名所
溪谷	菊川19	中山溪	幽玄の静寂はハイキングに最適
文化・産業	菊川20	長門鉄道	昔栄えた鉄道
歴史	菊川21	植松古墳群	古墳時代後期の横穴式石室の遺跡
歴史	菊川22	大内・毛利氏文書	卷子仕立 大内・毛利氏文書、軸装仕立 毛利氏文書
豊浦単体	豊浦1	下関ゴルフ倶楽部	日本有数のゴルフ倶楽部
豊浦単体	豊浦2	クスの森	日本三大クスノキのひとつ
豊浦単体	豊浦3	夢ヶ丘公園	響灘のナイスビュー
豊浦単体	豊浦4	小野小町	京を捨て移り住んだ小野小町の墓
豊浦単体	豊浦5	鳥山民俗資料館～重本 光	親子二代で収集した民芸品、工芸品数万点
豊浦単体	豊浦6	三恵寺(さんねじ)	本尊が秘仏の千手観音
豊浦単体	豊浦7	怡雲(いうん)和尚	室町時代、川棚温泉 回墓の人物
豊浦単体	豊浦8	川棚温泉	川棚温泉の古い時代
豊浦単体	豊浦9	種田山頭火	川棚をこよなく愛した漂白の俳人
豊浦単体	豊浦10	瓦そば	瓦で焼く茶そばの発祥地
豊浦単体	豊浦11	杜屋神社	もとは宗教行事
豊浦単体	豊浦12	バンバラ衆	秘伝の雨乞い神事
豊浦単体	豊浦13	管公祭	念仏踊りの影響を受けた楽踊り
豊浦単体	豊浦14	コスモス祭り	百万本のコスモスが咲くイベント
大陸との交流	豊浦15	エヒメアヤメ自生地	大陸と地続きであった歴史の証明
大陸との交流	豊浦16	四十塚	従者40人の斬首の地
大陸との交流	豊浦17	鬼ヶ城	蒙古軍上陸の都部
大陸との交流	豊浦18	千人塚	元軍の墓
大陸との交流	豊浦19	安養寺の大仏	元軍降伏、国土安穩を祈願
北浦海岸線	豊浦20	厚島	アルフレッド・コルトーが名付けた島
北浦海岸線	豊浦21	大吼谷蝙蝠洞	船で見れる「ユピナゴウモリ」の越冬地
北浦海岸線	豊浦22	宇賀の夕陽・響灘に沈む夕陽	夕日の名所

北浦海岸線	豊浦23	福德稲荷神社	夕日の名所
文化・産業	豊浦24	大敷網による漁業	日本敷網漁の発祥の地
文化・産業	豊浦25	室津浦の鍔絵	家運の繁栄を願い漆喰に描かれた絵
歴史	豊浦26	心光寺古墳群	朝鮮半島との交流の証明
歴史	豊浦27	川棚条里の緑釉陶器	国内で他に類を見ない延喜式陶器
歴史	豊浦28	中の浜遺跡	銅戈は山口圏域唯一の出土
下関単体	下関1	源平の遺産	
下関単体	下関2	維新の群像	
下関単体	下関3	明治の軌跡	
下関単体	下関4	みなと街下関	
下関単体	下関5	文化の創生者たち	
下関単体	下関6	歴史の遺構	
下関単体	下関7	関門海峡	
北浦海岸線	下関8	加茂島	三つの峰を重ねた美しい姿
北浦海岸線	下関9	毘沙の鼻	本州最西端の地
豊浦単体	下関10	中部銀次郎	日本アマチュアゴルフ選手権で最多の6度の優勝
歴史	下関11	中山神社	幕末の青年公卿中山忠光をまつる。
歴史	下関12	綾羅木郷遺跡	全国でも稀な緊急指定された史跡
歴史	下関13	陶けん(土笛)	日本初出土の弥生時代の土笛
歴史	下関14	蓋弓帽(がいきゅうぼう)	日本で初めて発見された金メッキの古代装飾具

観光振興にどのように寄与させうるかは、やはりそれほど容易ではないのであろう、どのようなネットワーク(観光ルート化)を図って行くか、関係諸団体とどのように調整し合うか、また、どのような主体を形成してコーディネートして行くか、などに関する提案については、その後まだなされていない。

しかしながら、100選として確定したデータベースの直接的な活用の提案ではないにしても、次年度の「下関地域中核都市づくり事業」の継続の中で、新観光戦略提言への事業である「豊関広域観光戦略プロジェクト」に結びつけている。それは、もっと地域の生活に根ざした産直・地産地消の活動やグリーンツーリズムとも関連する、体験型や気付き型の広い概念の新たな観光関連要素が配慮された観光振興への模索として位置づけられ、その事業により、山口県下関市の朝市、産直市場と自然体験型・滞在型観光情報のホームページ『ふうどin風土～食と緑のふるさとツーリズム』の開設(2005年4月)に至っている。

(5) 「下関ブランド」による地域振興方策調査²²⁾

これは、先に下関地域のエリアイメージに関して、下関市民によるものと市の外側の全国からのものと極端なまでのギャップが生じていることをアンケート結果のグラフ(図-2)によって示した調査の当のものである。この調査報告書は、山口県下関地域の振興計画に関し、当地域の観光関連商品・水産物・農産物等を含めて「下関ブランド」と位置づけ、それらを全国および海外に情報発信して販路拡大を図り、地場産業の一層の活性化につなげるための方策について、財団法人中国産業活性化センターが、電源地域振興指導事業の一環として経済産業省資源エネルギー庁から委託を受け、とりまとめたものである。

この調査では対象地域は、「下関エリア」として旧下関市、旧菊川町および旧豊浦町の1市2町としている。その下関エリアは、一頃地の利を活かして貿易や捕鯨や造船などのモノづくりの町として栄えたが、近年それら産業の衰退に見舞われてはいる。しかしながら、「ふぐ」をはじめとする水産物や「うに」「めんたいこ」などの水産加工品、「安岡ネギ」などの農産物、このところ脚光を浴びている「ふぐと関門海峡」をテーマにした観光関連商品、および「地域の工業製品や技術等、多岐にわたる産品や地域特性を多数有している」のであり、これらを今後いかに発展させ、「下関ブランド」と位置づけて、広く海外をも視野に入れて情報発信し、販路拡大を図りうるか、それによって、地場産業と下関地域の活性化にどのようにつながるか、その方策について調査検討を行っている。また、それは、グローバル化を視野に入れた地域産業活性化のモデルとして他地域にも波及することをねらったものでもある。

そのために、下関エリアの現状から地域の課題と特性を把握し、「ブランド」とは何かを再確認した上で「下関ブランド」の方向性に検証を加え、「下関地域ブランド」を形成する上での課題と取り組むべき施策を明らかにしようとした。その中でまず、下関エリアの特性やポテンシャルを次のように指摘している。

- 本州と九州を結ぶ交通の結節点に位置する。
- アジア(韓国や中国本土)の門戸に位置する。
- 「海峡」という日本でも稀有の地域特性を持っている。
- 農業・漁業・製造業・サービス業など、様々な産業で構成されている。
- ふく(ふぐ)といえは「下関」と言われるように、『ふく(ふぐ)』に関しては、味や品質に関してすでに全国で認知されている。
- 漁業の隆盛とともに培われた高い水産加工の技術集積がある。
- 農業に関しては、現状では生産量があまり多くなく地産地消にとどまっているが、地元、あるいは北九州市市場では、ブランドとして認知されている製品もある。
- 「海峡」の景観、「海峡」を経由した様々な歴史や、それとともに培われた文化などの集積があり、今後も「観光面」での飛躍が期待される。

また、下関エリアの地域課題については、次のようにまとめている。

- 本州と九州、アジアとの結節点、門戸の位置にありながら、その地理的特性を活かしきれていない。
- 「海峡」という日本でも稀有の地域特性がありながら、各分野での活用が十分にできていない。
- ふく(ふぐ)といえは「下関」と言われているが、「ふく(ふぐ)」にまつわるストーリーづくり、「ふく(ふぐ)」と農産物(「安岡ねぎ」や「ろーま」)などの連携、活用が十分とは言えない。
- 水産加工の技術集積があるにもかかわらず、全国ではあまり認知されていない。
- 農業に関しては、現状では生産量があまり多くなく地産地消にとどまっているが、観光客など外部から訪れる人に対するPR等が十分にされていない。
- 「海峡」の景観、「海峡」を経由した様々な歴史や培われた文化などの集積が多いにもかかわらず、現状では「海峡」という特性を、町づくり、観光地づくりに十分に活かしきれていない。
- 観光エリアとして近年脚光を浴びているが、宿泊観光に結びついていないため、現状では経済波及効果が低い。

そこで、地域活性の方策としては、「ふく(ふぐ)」をはじめとする水産、農産、水産加工品などの製品に加えて、「海峡」と言う大きなテーマを持つ自然、歴史、文化など多岐にわたるこのエリアの持つ「地域の魅力」を最大限に活かす「地域ブランド」によるのが有効ではないか、と提起している。

「地域ブランド」は、作られた製品が競合する他製品との差別化、区別化を図りうる時の個々の「プロダクトブランド」よりも、消費者へのインパクトの強い「地域特性」を最大限活かしたもので、地域にこだわり、地域に根ざした商品などを指す。下関エリアにおいては、「産品に加え、『海峡』という下関エリアだけの地域特性を活用し、モノが流通する『場』や、『目利き』の評価力など多義的なものを含み、「場における目利き」により情報価値や周辺価値がつくことによって、競争力がアップする」といった「地域ブランド」を目指すべきだろう、という。

この調査検証において、「海峡の特性を活かす」ことに焦点が当てられる。「下関のふぐ」は特に有名だが、アンケートと結果から下関は、全国的には「ふく(ふぐ)」などの海産物だけではなく、「海峡」、「壇ノ浦など」の源平合戦の歴史というイメージでも見られている。また、下関市民にとって地域の大事なものとして「海峡風景」は、最もよく引き合いに出される。このエリアの地域にない特性として誇れるもの第一は、やはり「海峡」であろう。そして、その「海峡」から何がもたらされるか、その特質を生かすとはどういうことなのか、どのような機能を果たしうるものなのか、について再確認し合う必要がある。報告書では、そのことについて、以下のように要点を整理している。

- 交通の結節点、要衝として場所と場所をつなぐ、結ぶ。
- 交通の中継点として、人やモノ、情報が経由する。
- 交通の結節点として、人やモノ、情報が通過する。
- 中継点として、消費者と生産者の両面のニーズを知ることができるマーケティング機能を持つ。
- 国内外の門戸として、様々な人やモノ、情報、文化などが交流、交差する。
- 様々な人やモノ、情報、文化を受け入れる許容性が生まれる。
- 様々な人やモノ、情報などを取捨選択する「選択眼」が生まれる。
- 固定的ではなく流動的な場所。
- 国境の町として国際感覚のある場所。

そして、「こういう地域特性、地理的特性の中で、下関エリアは『市場』の要素を育んできた。『市場』は、『人・モノ・情報』が、様々な所から入ってきて、『市場の空間』で『磨かれたり』、『取捨選択される』など何らかの付加価値を生じてまた他の地域に出て行く」と述べる。関門地域は、交流と連携に、また、人と人、人と物が出会い、行き交う市場(いちば)にさわしい場所柄なのだ。

海峡はむしろ隔てない。唐戸と門司、下関市と北九州市、山口県と福岡県、本州と九州、瀬戸内海と玄界灘、東アジアと日本、……さまざまを結びつなぐ結節点である。「海と陸との十字路」とはよく言われてきた。また、水俣市職員で地元学ネットワークを主宰する吉本哲郎氏が述べるように「海と陸の大道、それは人と物と情報の行き交うところ、交わる場所、言葉を変えるならば何かの留まり何かの溜まっていくところ、人が留まり、物が留まり、文化文物が蓄えられたところ」²³⁾でもある。それは、海峡を擁するこの場所が、マーケットプレイスであり「市場(いちば)文化」の育まれる場所であることを意味する。そのような特性を見出すならば、「海峡市場・下関」は、モタセ²⁴⁾として捉えられるかもしれない。

さらに、吉本氏は、人や物の動きの量と速度が増強され便利になる過程で、トンネルが掘られ橋も架けられることで「何かたまる場所」が失われていったプロセスがあり、確かにその過程で下関の優位性は失われてきたのでは、と、問いかけながら、下関という個性の確認と『ここ』づくりとして、新たな『関づくり』に期待を込めている²⁵⁾。正にモタセ機能の喪失こそが下関の衰退を意味しているのであり、新たな『関づくり』には、モタセ機能の回復が求められているのである。

報告書においては、「海峡」そのものがブランドとなりうるとして「海峡」をテーマコンセプトにした「下関地域ブランド」の方向性を次のようにまとめている。つまり、プロダクトブランドの個々の産品を大事に育てながら、それらのプロダクトブランドに地域の特性を付加することにより、産地間競争、国際競争の中で勝ち抜くだけでなく、関門・海峡という場を経由し、この場で取り扱われることで「価値」＝「ブランド力」が生ずるゆえに、「下関エリア」という大きな市場(マーケットプレイス)を経由する「人・モノ・情報」などすべてのものを含む「ブランド」づくり、また、それら「人・モノ・情報」が入ってきて通過、経由する過程で「磨かれ」「価値」を生じて出て行く「海峡市場」を目指す、と。下関の地域ブランド形成において、海峡を抱く地域の特質を活かした新たな「関づくり」、あるいは「モタセ機能」の回復が目指されているといえる。

「ふく(ふぐ)」は既に「人・モノ・情報」に価値を付加する「下関地域ブランド」の先例なのである。「下関エリア」の南風泊「市場」に水揚げされ、「競り」で目利きの厳しいチェックを受け、毒抜き技術「身欠き」が施され、品質や味や安全が保証されて「本物」と認められる。さらに薬味として「安岡ねぎ」、味付けの独特のポン酢などが用いられ、料理の品位が保たれる。この流れの中で、消費者に信用される「価値」が出てくる。そういったものを他にもどのように見出せるか、産出できるか、がこれから先「下関地域ブランド」の目指すものなのだろう。

そして、その「下関地域ブランド」を開発・育成・確立して行くために、今後取り組むべき施策として以下の内容を提起している。つまり、開発のためには、ブランド名、ブランド・ロゴの決定、「海峡」を活かしたまちづくり・観光地づくりの推進、そのような地域づくりには「海峡の景観を活かした観光地づくりの推進」、「市場機能の整備」、「交流機能の整備」、「水産加工技術の見学・体験機能の整備」、「く食」を活用した整備、および「情報発信機能の整備」が必要であり、また、育成・確立のためには、「ブランド認証制度の推進」、「情報発信機能の整備」、「セールス・プロモーションの確立」、作り手をはじめ、産品をプロモーションする仕掛けづくりをする。さらに、円滑な流通システムを管理するなどの「人材の育成」および「下関地域ブランド」推進機構の設立などが必要である、と。

そのためには、下関エリアの各分野の関係者が互いに連携・協力し合いながら、常にトータルコンセプトである「海峡」にこだわり、「海峡」らしさを打ち出したエリア開発＝地域づくりや商品づくりが大切である。結論部分では特に、関連諸団体・組織が一体的に取り組めるような運営体制である「下関地域ブランド」推進機構の設立が提案されている。しかし、今のところまだ、どこからも音頭取りは始まっていない。さらにいえば、前述した関門海峡の特質の把握を通して、モタセ機能の回復としての新たな『関づくり』に向かう意思の確認すら、容易になされないのが現状である。

4. 地域資源活用の方策—観光交流の推進への提案

いま、下関市は海峡ウォーターフロントを中心に、観光客数が増え、宿泊客数も伸びを示すようになり、観光面で賑わいを見せるようになってきている。海峡ウォーターフロントの施設群の整備が進められたのを機に、遅ればせながらさまざまに観光キャンペーンを打ち出し、また、観光寸劇などで市民参加型の観光づくりを実践するなど、特にソフト面・PR面から観光振興に力を注いできたことが、相次いだNHKドラマの放映やJRキャンペーンの取り組みなどの後押しを受けて、実を結んできたためであろう。さまざまな取り組み要素が相互に絡み合って功を奏しているのに違いないが、内発的な観光戦略によってというよりも、幾分外からの後押しが効いている面がないではない。下関における地域振興は、これまででも地域の内発力によるよりも、拠点性を有する場所柄からくる外的な力の作用を強く受けてきたのだが、観光面における現今の上げ潮もその

ような外的要素に依存する面があることを全く否定することはできないであろう。

観光は、いま、新たな地域づくりの戦略として焦点が当てられるようになり、従来の視覚型、消費型から体験型、発見型、気付き型へと、多様なそして広い概念で捉える方向へと変わってきている。観光振興をさらに本格化させるには、観光施設と行事、イベントとの連携、および、地域のまちづくりとの連携など、さまざまな交流・連携を通して、新たな観光ニーズにどのように対応するかが課題である。1市4町の合併が進められる段階での『新市まちづくり構想』の中で、まちづくりの主要課題の一つに「連携・交流の促進」を取り上げ、観光振興においても、確かに「観光」ニーズの広がりを意識した、地域の特質把握を把握した上での取り組み、地場産業やまちづくりとの連動などが盛り込まれるようになってはきている。しかし、まだその体制づくりまでに至っていないのが現状だろう。

とはいえ、これまで見てきたように、地域資源掘り起こしの作業として、いずれも市民参加や市民の意識向上を念頭に置いて公募をかけながら、3種類の「誇り100選」の事業が進められ、その過程で、いかにこの下関地域が豊かな地域資産を有しているかを多くが再確認するようになった。そのような認識を広める作用を及ぼした今回の成果の意味するところは決して小さくはない。この地には、さまざまに観光戦略を練るにふさわしい十分な地域資産が存在しているのである。だが、この地域資源掘り起こし作業において採用できなかった項目もあり、さらに趣向やテーマ性を変えながら、まだまだこのような作業が継続的に進められる必要があるに違いない。近代化遺産、まちづくり、伝統技能や地域の特異産業等の新たな観光資源、あるいは、地域の生活と結びついた観光資源などの確認作業が、更なる観光振興には必要とされているからである。中でも、スローフード志向や地産地消の広がりや流れ、あるいは、グリーンツーリズム、ブルーツーリズム、エコツーリズムなど、体験・学習・参加型の新たな観光＝歓交の創出の可能性がこれから先どのように探れるか、が課題である。

下関21世紀協会によるホームページ『ふうどin風土～食と緑のふるさとツーリズム』の立ち上げは、そのような観点からの、豊閑地域での新観光戦略提言への事業として継続されたものであり、より地域の生活に根ざした産直・地産地消の活動やグリーンツーリズムとも関連する、体験型や気付き型の広い概念の新たな観光関連要素が配慮されたものとして位置づける。

さらに、重要な課題として残されているのは、やはり、北九州市の分を含む関門分を合わせ総計にして2百数十に達する地域資産項目を、どのように観光戦略に結びつけるか、具体的には、これまでの掘り起こし作業の成果を、下関地域で懸案となってきた観光ルートの設定にどのように活かし、どのように観光ルートの形成を図りうるか、である。

ここで一つの提案であるが、これまでの「誇り100選」で選定されたさまざまな地域資産項目とさらに今後掘り起こし作業が進められる項目とを、カード化してみてもどうであろう。これまでの100選事業の成果は、CD-R、ビデオ、DVDなどに収められ、わかり易くビジュアル化された内容で全貌を知ることができるが、映像として流れてしまいがちである。誰もが参加できる形の観光ルートの設定に関するワークショップなどで、作業しやすい形のカードを自由に組み合わせ、マップづくりとも連動させながら、さまざまに活用できるのではないか。

そのような参加型の作業において、誰もが地域資産の認識を深めうるだろうし、地域資産項目の更なる内容充実も図れるだろう。地域の自然、歴史や史跡、文学や文化などを含め、ストーリー性のある、そして、市民生活とも密着したより親密性の濃いテーマをさまざまに想定できるようになるだろう。正に生み出すためには、組み合わせ方が問題なのである²⁶⁾。地場産業と結びついた観光も、環境問題の克服や産業観光と関連させた相互補完型観光の可能性も、そのような組み合わせ作業できっと見出しうるに違いない。そのカードをツールの一つとして活用しながら、種々の主体が関わりやすい場づくりを重ねることで、懸案のルートづくりの作業は可能となろう。その上で、コーディネートを担う主体を形成できれば、住民参加によるそのようなルートづくり作業によって、新たな観光の方向性の探求も可能となるに違いない。これからの観光(歓交)振興には、住民の関わりとさまざまな団体・組織をコーディネートできる主体の存在が不可欠なのだ。

その際、問われるのは、地域の特質をどのように読み取って行き、どのように地域づくり活かせるか、である。「『下関ブランド』による地域振興方策調査」では、「産品に加え、『海峡』という下関エリアだけの地域特性を活用し、モノが流通する『場』や、『目利き』の評価力など多義的なものを含み、「場」における目利き」により情報価値や周辺価値がつくことによって、競争力がアップする」といった「地域ブランド」を目指すべきだろう、として、「関門海峡」に焦点を当て、「関門海峡」の特質を整理した上での「下関ブランド」形成を提起している。すなわち、海峡を抱く地域の特質を活かした新たな「関づくり」として、あるいは「モタセ機能」の回復として、「海峡市場(いちば)」が目指されるべきだろう、と。

筆者は既に、海辺のマーケットプレイスによる再開発に、新たな港町づくりの内的な動機を求めていく必要や、下関地域の背後の基盤として環西瀬戸圏域の存在を意識し、その圏域の物産交流拠点としての展開可能性を提案している²⁷⁾。さらには、合併によって豊穡な第1次産業を擁する広大な背後地を抱え込むことになったことは、むしろ交流の結節点としての色合いを濃くしたのであり、交流都市としての風格、背後地、海峡、市場文化、そして「端っこの力」、結節点をキーワードに、中核市を大きなターニングポイントにできるのでは、とも主張している²⁸⁾。

結びつき合いや関係づくりが求められる時代の地域振興策として、あるいは、観光交流事業の展開による地域振興策として、

関門地域の特質を生かすべく、関係の場、交流・連携・出会いの場、舞台としての海峡空間に焦点を当てることは、適切な方策の一つであろう。

海峡の特質を確認し合うことは、「地元学」に習って言えば、関係・交流の場づくりおよびコミュニケーションやコーディネートやファシリテート、あるいは品定め手法等の育成を主眼に置くような「関門学」や「海峡学」が提起されてしかるべきほどのものである。そのような「関門学」や「海峡学」によってでも「関門海峡」の意義を再度確認し合い、関門地域の自然、歴史、文化、料理等の資源を活用した「関門ブランド」(下関ブランド)創出の可能性を探って行きながら、「関門観光圏」の確立は目指されるべきだろう。

そのためには「下関ブランド」づくりで提案された「下関地域ブランド」推進機構のような協働・連携して取り組む組織の立ち上げ、あるいは、観光キャンペーン・観光プロモーションの展開やPR活動を担うインフォメーションセンターの設立などが必要である。地域住民や民間事業者が主体となって行政がバックアップ・サポートする、そのような協働の場が機能することで、観光戦略の設定、それに応じたルートマップや広域マップの作成、ひいては、アクセスの整備、誘致や案内に向けての情報発信もこれまでよりきつと充実するに違いない。

歴史遺産を観光資源として取り上げる意義は、恐らく、地域の特性・特質を把握すること、土地柄や場所柄を明確にすることにあるに違いない。今後の地域資産、すなわち新たな観光資源や素材の発掘は、恐らく、これまで「誇り100選」事業で主として行ってきたような、初発のものとか日本一とかいった特段のもの・ことを探し当てるだけでなく、地域の生活のありようと結びついた生活者の視点に立った当たり前のもの、足元から見つめられたものが含まれて行くに違いない。

自分たちの楽しみが増す方向で魅力づくりが営まれ、そこに住んでよかつたと思うようなところをつくって行く、また、自分たちが住んでいる場所を読み解きながら地域の魅力を見出して行く、あるいはそれらの魅力を磨き上げ、さらに生活環境の質の向上を目指して行く、そのようなプロセスを経て、結果としておのずと外からの人をひきつけるようになり、外からも評価され観光の魅力につながる。そして、自然とかかわり合う、地域とかかわり合う人々の営みが尊重され、外来者とも体験を共有する。そのようなプロセスを経ることが「観光から歓交へ」の意味するところではないだろうか。

広域合併によって下関市が、背後地に豊穡な第1次産業を擁するようになったことは、背後地の豊かさをさまざまな地域との交流の場面で活かせることを意味する。関門海峡空間の特質から提起される新たな「関づくり」、「海峡市場づくり」を目指す上で、好条件を得たことにもなる。その好条件を活かす上でも、下関地域において、都市と農山漁村とのつながり・交流をいかに進めているか、その交流の内実や進め方自体が改めて問われることになりはしないか。先述の地元学の吉本哲郎氏は、その点に関しても示唆を与えている。ここで再び引いておこう。

「都市農村交流という言葉がある。グリーンツーリズムという言葉がある。交流で大事なことは、田舎とマチの交流に必要なことは己を知ることである。自分の地域を知ること、そのうえで交流しないと、ここには何も無いという『愚痴』合戦になる。それでは何も始まらない。また、グリーンツーリズムは生活の旅である。生活観光である。であればこそ自分の持っている力を調べて自覚しないと始まらない。」²⁹⁾

「昔はよかつたが、今は……」といった過去語りは、もうおしまいにしたものだ。

最後にもう一つ、引いておこう。現今の社会の疲弊状況、特に若者を覆っている閉塞状況を捉えたときに、各人が近い距離で意思決定に参加できて個々人の可能性が引き出される(政治面)、多くのものがモノづくりに参与できる(経済面)、さまざまな文化を多くのものが参加型で享受できる(文化面)、そして、家族や知人など身近な人たちと豊かな感情の交流ができる(感情面)、そのような社会を今後のより良い社会としてイメージしながら、関西学院大学の野田正彰(比較文化精神医学)は述べている。

「身近な人と、意味のある会話をして、交流をちゃんとつくっていくということ、つまり、他者が日々送っている生き方のすばらしさを、発見したり、それに感動したりすることで、私たちはもう少し幸せになりえると思う」³⁰⁾と。

謝辞：(財)下関21世紀協会および下関市観光振興課より貴重な資料の提供を受けた。ここに記して謝意を表します。

脚注

- 1) 下関市・豊浦郡4町合併協議会『下関市・豊浦郡4町 新市まちづくり構想』2003年10月。
- 2) 山口県商工労働部商業観光課編『山口県観光基本構想—おいでませ山口ビジョン』1999年8月。
- 3) 下関市総合政策部企画課編『第四次下関市総合計画—海峡の恵みと歴史の心を翼にひかりかがやく快適環境都市・しものせき—』（下関市）2001年3月。
- 4) 下関地区広域行政事務組合編『下関地区第四次広域市町村圏計画（平成13年度～平成22年度）』（下関地区広域行政事務組合）2001年3月。
- 5) 下関市・豊浦郡4町合併協議会『下関市・豊浦郡4町 新市まちづくり構想』2003年10月
同『下関市・豊浦郡4町 新市建設計画』2004年5月。
- 6) 観光客数は、2003年には、約560万人を超えて過去最高の565万人に達している。
- 7) 示している表やグラフは、下関市観光産業部観光振興課の資料提供による。一部はホームページ <http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/kanko/> に掲載されている。
- 8) 下関商工会議所・豊関地域内産業構造調査及び課題委員会『商工会等広域連携等地域振興対策事業報告書「豊関地域産業構造の現状と課題及び振興策」』2004年3月、p.87。
- 9) (財) 下関21世紀協会「しものせき21」vol.27、2002年6月。
- 10) (財) 中国産業活性化センター『山口県下関地域振興計画調査報告書（「下関ブランド」による地域振興方策調査）』、2003年3月、p.113。
- 11) 同上 p.197。
- 12) 同上 p.113。
- 13) 9) に同じ。
- 14) 1889（明治22）年4月の日本で最初の市町村制施行時、全国で31の市が誕生した折、山口県では唯一の市として「赤間関市」が発足。1902（明治35）年6月に、下関戦争や下関条約などで国際的に名が通っていた名称に統一するとして「下関市」に市名改称された。
- 15) 観光魅力づくり研究会編著『一地域一観光への道しるべ—観光魅力づくりの手引—』（ぎょうせい）2004年5月。
- 16) 沖田哲義「小さな世界都市を目指して」（財）下関21世紀協会「しものせき21」創刊号、1989年3月、pp.7。
- 17) 「下関の誇り100選」実行委員会「事業計画メモ」より。
- 18) 同上
- 19) 海峡都市活性化研究部長室田直樹「『しものせき誇り100選』発表会を終えて」（財）下関21世紀協会「しものせき21」vol.28、2003年2月、p.30。
- 20) 「女性が選ぶ関門海峡の誇り100選」実行委員会『女性が選ぶ関門海峡の誇り100選報告書』2004年7月。
- 21) 「豊関の誇り100選」実行委員会「事業計画メモ」より。
- 22) 10) に同じ。『山口県下関地域振興計画調査報告書（「下関ブランド」による地域振興方策調査）』
- 23) 2005年11月26日に、下関市立大学市民大学と下関21世紀協会との共同企画で開催されたシンポジウム『新しい市になったのだから……地域づくりの取り組みをいっしょに考えてみよう—観光から歓交へ—』において『三つの元気、三つの経済—元気になった水俣から—』と題して基調講演を行った折、吉本氏が自ら下関を来訪しての感想を込め、会場でメッセージを披露したその一部を引用している。
- 24) 「モタセシステム」とは、筑後川下流域において橋の部分で桁下をコンクリートや石などで覆い、大きくは開放せずに、小さな穴を通して上流からの流れを絞り込んだ所を「橋になってない、モタセになっとる」という地元の人達の言い方から発想を得て、下流域に広く分布する越流堰（堰タイ）など、水流をつなぎとめる装置類を「モタセ」と呼び習わしていることや「溜めをつくる」ことを「モタセ」と称していることから、筆者が命名したものである。筆者は、その下流域で展開する思いやりに満ちた時間幅を利用し「溜め」を組み込んで矛盾を克服するといった技術システムの特徴を明らかにしながら、モタセシステムの技術論を展開中である。棚田にも、節水技術にも、溜めを作って汚水を流す流量調整器が取り付けられている高性能合併処理浄化槽にも「モタセ」のしくみは組み込まれている。また、環境保全資源としての森林にも水循環における保水の役割や、地球上の炭素循環の中で炭素を一時的に固定する溜めの役割からして、「モタセ」のしくみが基本にある、と捉えている。
- 25) 23) に同じメッセージの一部。
- 26) 23) において吉本哲郎氏は基調講演のレジュメの中で、「新しいものとは、実は『あるもの』と『あるもの』との組み合わせである」、「実は組み合わせるとは、ひねったり、変えたり、組み合わせたりすることの総称である」と述べている。
- 27) 坂本紘二「経済最前線」（財）下関21世紀協会「しものせき21」vol.26、2001年11月、pp.4-6。
- 28) 坂本紘二「中核市下関どうみる」山口新聞2005年10月1日。
- 29) 26) に同じ基調講演レジュメの中で。
- 30) 野田正彰『この社会の歪みについて—自閉する青年、疲弊する大人—』（有）ユビキタ・スタジオ、2005年8月、p.111。